

---

# 恋姫無双 槍兵の力を持ちし者が行く

ACEDO

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

恋姫無双 槍兵の力を持ちし者が行く

### 【Nコード】

N6472U

### 【作者名】

ACEDO

### 【あらすじ】

いわゆる転生物です。

神様に力を貰った男が恋姫の世界を生きていく物語です。キャラが崩壊、又は確立していません。

少しアンチが入ります。

のんびり更新していきます。気長に見てください。

## 1話 はじまり（前書き）

どうも、他にも書いている小説があるのですが、こちらをメインにやっけて行こうと思います。

駄作ですが宜しく願います。

## 1話 はじまり

「こら！蒼 そう ！待ちなさい！今度という今度は許さないから！」

皆さんはじめまして今作品の主人公の李高雲犬です。なんと只今三國志の世界で一から生活しています。なんか神様のミスで死んでしまったので、面白い所に飛ばしてやるよ。と言うことでなんか色々身体能力のサービスを貰い、はや10年、今は洛陽で楽しくしています。

「待ちなさいと言っているのが聞こえないのかしら？」

えっ？なんで追われているかって？それは通っている私塾をサボり、それがばれて幼なじみに追われているからなのさ！俺は風になる！すいません。現実逃避です。まあ転生しただけあって昔は神童とか呼ばれ、私塾に入れさせられ色々教えてくれたのですが、もはや分かってる事ばかりだし、自分は武を訓練したいので度々抜け出しているのですが、天才な幼なじみにばれて追われるのが常になっています。

というかよく飽きないよなあいつ。

「まったく、この曹孟徳の言うことが聞けないのかしら？……なんでこんな奴に真名を預けたのかしら私。」

そう！幼なじみというのがあの曹孟徳なわけですよ。紹介すると真名は華琳。

ちなみに、真名というのはその人の誇りで相手が許可しない限りそれで呼ぶことを許されない名前のことだ。因みに俺は蒼  
説明終了。

そして、驚いたことに三國志の有名な将がみんな女の子なんですよ  
これは驚いた。

まあそこは置いて、華琳の紹介だな。容姿はかなりいい。だつて女にモテてるからなあいつ。あとドS。たまに誰かを虐めて悦んでるとこ見たことあるし…そして天才だな。もう完璧に近いところがある。

そして、唯一欠点なのは身長も胸も小さいこと（ガン！）イテーなあいつ。てかこれあいつの得物の鎌『絶』じゃねーか！

「なんだか私に対してとても失礼なことを考えてなかった？蒼？」

スゲーなこいつ読心術も出来るのかよ。ってそれよりも！

「危ないだろ華琳！下手したら死ぬとこだぞ本当に。」

「あら、あなたぐらいの実力だったら簡単に避けられるはずよ？」

「簡単に言ってくれるよ。まったく…。俺は私塾の落ちこぼれだぞ？買いかぶり過ぎだよ。」

「自分を卑下するのはやめときなさい。あの時私に見せたじゃないの。それに私の目は確かなの。あなたは実力を隠している。」

まあ確かにそうですよ。神様に某聖杯戦争の槍兵の身体能力を要求したから。けどここは敢えて白を切る。

「それでもだ。買いかぶりだ華琳。もしそうだとすると今ここで自分の手札を見せる必要がない。」

「ふふ、相変わらず面白い言い回しね。蒼。けどあなたは私の物なの。あんまり私に恥をかかせないで頂戴。」

とか言いながら微笑む華琳。つーかここで可愛いなと思う俺はもう完璧にアウトだ。惚れた弱みって奴だ。

「ったく。わかりましたよ我が主様。メンドクセーがやってやるよ。」

「分かったのならいいわ。だから直ぐに私塾に戻って」けどな華琳、俺が本気を出すのは実戦でだ。すまないな。けど絶対華琳の期待に応えて見せるよ。お前の喜ぶ顔がみたいしな。」っ／＼わかったわよ。けど期待に応えない場合はその首、叩き切ってやるから。／＼

「それは怖いな。（汗）わかってるよ。だから安心しろ。お前を絶対王にしてやる。」

ああ。何がなんでもだ。この惚れた女を王にしてやる。例え歴史がなれないと証明されててもだ。それに歴史を知る俺がいる。なに、分の悪い賭けは嫌いじゃない。

## 1話 はじまり（後書き）

基本、作者の趣味が暴走します。

感想等をおねがいします。

## 2話 出会い（前書き）

どうも、ストックが少ししかないのに更新しまくる、俺、参上！

つーことで今回は夏侯姉妹の登場です。

かなり無理矢理とキャラの崩壊があります。ご注意を。



## 2話 出会い

どうもこんにちは蒼です。あれから一年が経ちました。この一年色々ありました。

私塾を抜け出して、華琳の追跡を振り切ったり、逆に捕まって膝詰め説教を食らったり、華琳に飯を奢らされたり、同じ私塾の袁紹（もちろん女の子、ただしバカ）を華琳と二人呆れながら騙したり、華琳と賭け事をやり財布が空っぽになりかけ土下座をして情けをかけてもらったり、たまには勝って負けた分を取り返したりと……。つえ？殆ど華琳と一緒にいる？当たり前じゃないか。惚れた女と一緒にいたいんだよ！悪いか！告白はしたか？してないよ！ヘタレ？ほっとけ！

「つと！蒼！聞ってるの！」

「ああ、悪い華琳。ちよっと考えごとをしてた。で、なんだって？」

「もう、すっかり聞いておきなさい。明日予定はあるかしら？」

「明日か、明日は釣りをする予定だk」ならいいわ。蒼、明日付き合いなさい紹介したい娘達がいるの。「人の話は最後まで聞け！つたく、面倒くさいが、まあ、釣りをするだけだからな。分かったよ。明日だな。でどんな奴等なんだ？」

「それは会ってから貴方の目で確かめなさい。」

「ちよっと待て！少しぐらい教えてくれていいだろ？どんな性格とか、禁句とかあるだろ？」

「あら、それで貴方が慌てる様を見るのが楽しみなのに教えるわけ

ないでしょ。」

ああ、そうだった。こいつ、ドSだった。だがなんとしても情報を引き出さないと。

「頼む。華林。さすがに初対面の人間と気まずいことにはなりたk  
「ああそつえば、先日の賭けの負けた分どうしようかしら」スイ  
マセンデシタ。」

もう詰んでた。もはや分の悪い賭けとかじゃない。分なんかないじ  
やん。  
まあ、いいやいきなり怒鳴られたり、切り掛かれたりはしないだ  
ろつ。

side 春蘭

今日は華林様を通つてらつしゃる私塾の同期で中々見所があるよう  
で私達姉妹に紹介するそうだ。

私が華林様にふさわしいかどうか見極めてやろう！

「姉者、気合いの入れすぎだ。また空回りをして華林様に怒られる  
ぞ。」

うーむ、そうか。秋蘭の言う通りかもしれん。

いや、待て。私が来る者より強いことを証明すれば華林様に誉めら  
れるかもしれん。

む、来たようだ。一体どれほど強いんだ？腕が鳴る。

ん？華林様の後ろにいるのがその者か。しかし、男か。男？そうか  
！華林様はこの者を倒せというのですね！

side out

というわけで華林に連れて来られたのは華林の家の一室だった。

「ここに私が紹介したい娘達がいるわ。先に私が入るから付いてきてちょうだい。」

「了解」

と言いつつ華林が開けた部屋の中には自分より少し年上な感じの女が二人いた。一人は青い短い髪でいかにも賢そうな女。もう一方は長い黒髪の女だが、なぜか黒い方は犬や猫をイメージしてしまう。そして、その黒い方が俺を見るなり近づいて来た。

「気のせいかもしれないが右手に剣を持っているように見える。そして目の前に来て……」

「死ねえ！」ドガッ

「おわっ！危ねーな。」ヒョイ

おもいつきり俺を叩き切ろうとしてきた。まあ俺は避けたけど、もとの場所、穴が出来てるぞ。なんつー馬鹿力なんだか。

「危ーな！当たったら死ぬぞこの威力！」

「当然だ。殺す気で放ったのだからな。」「春蘭！」華林様、こいつは男ですぞ！今すぐ討ち取って「春蘭、やめなさい。」「華林さま」

なんなんだこれは？まるで飼い犬と主人を連想させる眺めは。しかも華琳に怒られて何故か目が潤んでるし、それに理性的に見えた青い方は「姉者、カワイイ」とか言ってトリップしてるし。

誰かなんとかしろ。このカオス。

## 2話 出会い（後書き）

いきなりですが、アンケートします。

実は少し迷っていることが二つありまして。

一つはあの種馬を参戦させるべきかということです。まあ、参戦するとしたら蜀になります。

そして二つ目はこの後一時華琳達と離れます。

そして、合流する時は、原作の初めからか、または三羽鳥の所で合流するかです。

何も返事が無かった時は此方の勝手に進みます。

期限は大体1週間ぐらいでやります。ではノシ

### 3話 試練（前書き）

予備校が忙しいよ

ということでは始まりました。

今回はなんか全体的に無理矢理進ませています。  
キャラ崩も注意。

### 3話 試練

皆さんこんにちば蒼です。今、目の前には華琳の他に二人の女がいる。

なんとか黒い方を宥めた華琳が疲れた様子で謝ってきた。

「ごめんなさい。蒼。よもやこんなことになるとは思ってなくて。」

「いや、いいよ華琳。俺はあんまり気にしてない。けど次は気を付けとけよ。俺ならともかく、他の奴ならきついぞ。」

「ならいいわ。それと、助言は有り難く受け取るわ。」

ん？またなんか黒い方が俺を睨んでる。

なんかさっきのあいつの華琳への態度とか見てたら、俺が華琳の真名を呼んでるのが気に食わないようだな。

「華琳様！何故男に真名を預けているのです？華琳様はあの時……」  
春蘭！彼、蒼はいいの。色々あつてね。」くっ！しかし、これは華琳様は認めても、私は認めません。」

「華琳様。これは私も反対です。彼はあの『私塾の落ちこぼれ』の李雲犬でしょう。彼を手元においておくのは些か軽率かと。」

はあ。色々言ってくれるよ。まあ、狙い通り無能の噂が出るのだが、目の前で言われると少しへこむな。それになんか嫌な予感がする。経験上こうゆうのは良く当たる。

「なら、彼が有能なのを証明出来ればいいわけね？」

「はっ」

「なら蒼。あなた春蘭と戦いなさい。春蘭もそれでいいわね。」「はい！華琳様！」

「って、ちよつと待て華琳。これはお前の将来の家来の顔見せだろ。それに前にも言ったが、俺は手札を見せたくないんだよ。」

「けど、あなたはあの時言ったわよね？『お前はただ「戦え」と言え。なら俺は戦う。』と」

「お前はよく覚えてるなそんなこと。……わかった負けだよ負け。但し条件がある。この三人以外にだれも見せたくない。理由はわかるよな？」

まったく、恥ずかしい台詞思い出させやがって。俺は条件付きの了承を出し。

華琳はその条件を飲み、俺達を中庭に連れていった。

そして、今日の前にはさつき俺を襲った剣を構える黒い方がいるわけ。対する俺はというと……。

「ほう、無手とはな、珍しい。」

はい。そうだよ。素手だよ。ステゴロだよ。だって槍は家に置いてあるし、すぐに終わりたいし……。

けど、主武器が槍とか聞いたたら手加減されたとか思われて怒るだろ



うな。

「まあ、こつちも色々あるんだよ。」

「そうか、ならば……。我が名は夏侯惇 元讓、華林様の剣だ。」

「おいおい。いいのかよ名乗りを上げて、そんなことされたら、俺は今の本気を出すぜ」問題ない。早く来い」

まったく、某槍兵の性格のせいか、面倒くさいのに楽しいと感じてしまう。止めねーよこれは。

「ヒュ」 いいね。この頃刺激が足りないと思ってたんだ。なら、我が名は李高 雲犬。今のところは華林に認められてる落ちこぼれだ。せいぜい楽しませてくれ。」

「二人共、いいわね。では、始め！」

華林の合図と同時に襲って来る剣を最小限の動きで躲し続ける。まだ幼いからかまだ未熟だがあの夏侯惇だ。戦乱の世になれば猛将と呼ばれるぐらいの実力になるはずだ。しかし、予想通りとはいえず、女だったな。ただちよつと脳筋っぽいけど。

「フハハハハ！どうした！避けているだけではつまらんぞ！」

「ふうん、んじゃ今からあんたに攻撃するからちゃんと対応しろよ？」

そう言いつつ俺は距離を少しあげ身構える。あっちも此方の雰囲気が変わったのを感じたようで守りを固めてるようだが。

（ちよつとばかり甘いな）

俺は距離を一気に縮め、腹に掌手を叩き込み一時的に相手を動けないようにした後、今度は武器を取り除くため、両手首に一発ずつ拳を放ち、武器を落としたのか確認しないまま後ろに回り込み、首筋に手刀を入れ。気絶させそのまま抱き上げる。この間約一秒。我ながらなかなかいい動きだったと思う。

side 秋蘭

なんなんだあの動きは。距離を詰めたと思った途端、反応できない速さで姉者の懐に入り込み僅か四発の打撃で姉者が倒されただど？

「これにて終了つと。華琳。これでいいよな。」

「え、ええ。この勝負は蒼、貴方の勝ちよ。」

それにしても槍だけじゃなく無手でも強かったのね。」

私は華林様の言葉に耳を疑った。つまりあの男は武器を使うにも関わらず無手で姉者を倒したということか。つまり……。

「李高殿。貴方は先程の立ち合いで手を抜い」てねーよ。俺は槍と無手両方を使うんだよ。まあ主に槍を使うが、その分無手が弱いということはないから安心しな。それに俺は『今の本気』を出すと云ったぜ。それに相手に失礼だろ？」ふ、そうか。済まないな。先に私の真名を預けよう。私は夏侯淵 妙才。真名は秋蘭だ宜しく頼む。

それと先程の落ちこぼれと呼んだことも済まない。貴方へ「蒼だ。」分かった。蒼は華琳様に仕えるに値する人物だ。」

あのような武を華琳様も見抜いておられたのだろっ。あの武は豪傑と名乗るにふさわしいものだ。

私は弓を使うが今の蒼には当てられる自信がない。

華琳様が立つ時、そなたの武、期待させてもらっぞ。

side out

その後のことはあまり思い出したくない。

簡単に説明するとあの後、夏侯惇が起きて、秋蘭が負けたことを説明し、渋々ながらも夏侯惇は真名を預けて来た。（春蘭というらしい。）

その後、春蘭が「もう一度勝負だ!」とか「秋蘭と二人でやれば勝てる」とか言われ華琳が止めるまで何度も戦った。（勿論勝ったが）そして、疲れていたせい、文官としてもそこそこ出来ると口を滑らせたおかげでどのくらい出来るか試された。

それが終わったらもう夜で、今は自宅に帰っている途中なのだが……。

「驚いたわ。まさかあなた文にも秀でていたのね。」

隣に華琳がいる。嬉しいことは嬉しいが屋敷を出る時の春蘭と秋蘭の目が怖かった。

目で「テヲダシタラクロス」って語ってるんだから。さすがにビビった。あいつらも華琳が好きなんだな。

「まあな、神童とか呼ばれてた時期もあつたんだ。これも手札の一つだよ。だがあんまり期待はするなよ。自覚してるけど俺は武に偏ってるからな。」

「それぐらいは分かってるわ。ふと疑問に思っただけけど、何故私に仕えようと思ったの?あなたが実力を出せば有力な諸侯に召し抱えられるわよ。」

「ん？なんだおめー。自分の才と器に自信がねーのか。」

「そんなじゃないわよ。ただ、なんでかなー？って思っただけ。……別にどこかに行つて欲しくないとかじゃないわよ。／／」

なんか途中から聞こえなかったが、改めて考えてみるとおかしなもんだ。

最初は劉備に仕えるつもりが今は華琳に仕えてる。

ホント、人生はわからねーな。

「何、笑つてるのよ！」

「つと、スマンスマン。お前に仕える理由だよな。それは、お前に惚れたからだ。「なっ／／」お前の王の才に惚れた。「そうよね。まったくあんたは。」まあ他にもまだあるが、これが理由の一つだな。おい、何怒ってんだ？」

「う、うるさいわね！私はもう帰るわ！……一瞬期待した私が馬鹿みたいじゃない。／／」

何故か怒りながら帰る華琳を見ながら。思う。

（もう一つの理由はまだ言えねえな。俺がもつとでかくなって言つてやる。）

俺はある決心をしながら家路についた。

### 3話 試練（後書き）

まあ、華琳さんとの過去バナはいつか書きます。

アンケートお願いします。

ではアデュー（＾Ｏ＾）ノ

## 主人公設定（前書き）

ここらで一発主人公設定を。

…なんかランサーさんから離れてるような……。

## 主人公設定

李高 雲犬 りこう うんけん

前世では大学生だった。

けれどなんの刺激も無く、ただ当たり前の事を繰り返し、ちっとも前に進まない世界に飽き飽きしていた。かといって死にたいわけでもなく、生きたいわけでもなく、ただ無気力にすごしていた。（本人談）

けれどもなんの拍子か死亡。その後、神様のミスであることが発覚し、交渉の末、チート能力（某槍兵の力）を獲得し、記憶を持ったまま、恋姫の世界に転生を果たす。

性格は基本面倒くさがり。だが他人が絡むとやる気が出る。賭け事が好きで、普段はちまちま点を重ねるがここの一番で大勝負にでるのが好き。

（それが原因で大抵負けている）

才能のあり未熟な人にはあだ名で呼ぶ。（認めたら名前で呼ぶ）

時間がある時は、絡繰り弄りや釣りをしたりして過ごしている。

戦い方は某槍兵と同じく速さを主体とした戦い方。

ただし無手での戦いも想定しているため腕力もそこそこあり、気も使える。それと、戦闘狂。雑魚相手に遊ぶ悪い癖あり。

## 武器

《赤光》 某槍兵が使っていたのと大体同じ、しかし魔術的要素は殆ど制限されていて宝具としての力は一部例外を除いて使えない。特殊なのは絶対に折れないことと一定時間離れていると、持ち主の所にもどる。

手甲に絡繰りを仕込んでおり、肘の方から剣が出る。

スキル

大体、某槍兵と同じ。

戦闘続行・仕切りなおし・矢避けの加護がある。

（ルーンは使えない）

そのかわり、気を全般的に使え、運もそこそこ良い。



## 主人公設定（後書き）

どうでした？

参考に色々こうした方が良かったら言ってください。

アンケートに答えてくれた人、ありがとうございます。まだ答えてない人はもうすぐなので、お早めに。

ただ、二つ目の方がなにもないので、少し不安です。

まだアンケートは終わってません。

次は結果が出た時にまた。アデュー（＾Ｏ＾）ノ

#### 4話 旅立ち（前書き）

どうもー

やっぱ恋姫は人気あるんですねー。  
アクセス数を見たら驚きました。

一応、此処で一区切りになります。所謂「〽編」とかのやつです。  
此れは「少年編」と無難に名付けてみます。  
アンケートは後書きで。

## 4話 旅立ち

皆さんこんにちは蒼です。あの顔見せの一件以来。華琳達の買い物に付き合わされたり、春蘭と秋蘭との立ち合い。（たまに華琳も参加する）また、春蘭を除く三人で戦術や内政の討論をやったりと、穏やかに過ごしていました。

そして今俺は……三人の前で土下座をしています。

何故こんなことになったかは自分のある決心が原因でした。

「旅に出る？」

「ああ、これは前から考えてたことだな。大体二、三年ぐらい大陸中を回って、名を上げようと思ってるよ。」

「私は反対ね。漢の政治はもう腐ってるから、どうせ世の中は乱れるわ。その時になったら勝手に貴方の名は上がるはずよ。」

「私も華琳様の言うとおりだと思う。私もそこまで焦る必要はないと思うぞ。」

「そうだ！私に負けてから行け！」

といつも通りに四人が集まっている時に俺が旅に出ることを言う、すぐさま反対された。なんだか春蘭を除いて穏やかな口調だが何故だか目がなんだか怖かった。……それと春蘭、つまり俺が負けたら

出ていいのか。どんだけ負けず嫌いなんだよ。

「つまり、おまえらは反対だと？」

「「勿論よ（当然だ）」」

「分かったよ。（説得を）諦めるよ。まったくなんで反対するんだか。んじゃ俺は帰るわ」

すまんね。これだけは譲れないんだわ。  
いずれ必要になるかもしれないからな。

置き手紙を置いておいたらどうにか許してもらえるかな？

「……どう思う？ 秋蘭？」

「……華琳様のお考えの通り出て行くかと。」

「……そうね、なら春蘭。明日蒼が旅支度をしていたなら捕えてここに連れてきなさい。」

「はい！わかりました！華琳様！……バカ！声が大きい！」

なんだか後ろで何かを喋ってるみたいだ。気にしない、気にしない。それより、何だか騙して出ていくから罪悪感があるけど、華琳を出し抜ける。という感情もある。

まあ、出し抜けるなんてもう一生ないからな。この事は胸に刻もう。

そう思ってた時もありました。

「で。何か言い分は？」

で、只今絶賛土下座中です。なんだよ少し短め（約三時間）に睡眠して夜暗い内に出ようと思ったら春蘭に追いかけられ、その後、三人に囲われ今に至るって。あの時の俺の台詞返せ！

「頼む。華琳。こればかりは俺は譲れない。「理由は？」だから名を上げ」「それだけじゃないはずよ。全て言いなさい。」分かった。全て言うよ。」

そして、俺は本当の目的を話し始めた。

「ふーん。私兵百程度に他の王の観察、それと各地の商人のつながりね。」

「なあ、蒼。前二つは分かるのだが最後の一つが分からないのだが。」

「おいおい。他の人材が来るか、俺が帰るまで華琳の支えになるのはお前だぜ秋蘭。少しは分かって欲しいな。」

「待て！なぜそこで私の名前が出てこない！私は支えにならるよ。春蘭は軍事に置いては華琳の大きな支えになってる。だが今俺が言いたいのは軍事だけではなく、内政などのあらゆる支えと言った。わかるな。」む、むう。」

そう拗ねている春蘭を宥めながら（その時に秋蘭が「姉者は可愛いな」とつぶやいてたのは気のせいだと思いたい。）秋蘭と華琳を見る。華琳は分かったようだが、秋蘭はまだ分かなそうだ。ヒントを出してやるか。

「なあ秋蘭。戦争には何が必要だ？」

「それは、兵に武具それと食糧だろう。」「違うな。もっと根本的な物だ。」「…そうか！金か！？」

「そう！金がなきゃ食糧は買えないし、武具も買えない。」「

「つまり、その金の流れを見張り、此方が直ぐに対応出来るようにね？」「

「まあ、その通りだけど、俺は出来れば流れを操作したい。」「

詳しい説明をしてやると、息を飲んでしまった二人。春蘭はというと頭から煙が出ていた。

「今、改めて貴方が私の下に居てくれてよかったと思ってるわ。」「

「私もそう感じました。華琳様。」「

「まあ、操作は出来ないかもしれないけどな。

で、俺は此等の目的は分かったわけだが旅に出ても構わないかい？」

「ええ、ここまで考えて旅に出るのなら許可するわ。」「ありがたいな華琳。」「ただし！絶対に帰ってきなさい。貴方は我が覇道に必要な人材だから。」「

なんだか許可も出たことだし一人ずつ抱き締めながら言葉を交わし合う。

「秋蘭。華琳の支えは頼んだ。あいつはなんでも出来るからなるべく一人でやる悪癖がある。後、春蘭の歯止めも頼む。ただし、無理はするなよ。無理して倒れたらあいつらも、それに俺も悲しむからな。」

「フツ、分かっているさ。蒼、お前も達者でな。必ず帰って来い。」

「春蘭、お前は直ぐに突っ走る性格を止める。突っ走る前に回りを見る。そして秋蘭や華琳の言葉に耳を傾ける。後、俺が戻るまでに強くなれよ。」

「そんなこと分かっている！貴様こそ強くなって帰ってこい！私はもっと強くなってるからな！」

「華琳、お前はもつと回りを頼れ。でないと後々大変なことになるぞ。後、俺の部屋に色々な政策の草案と経済のことについて書いた本がある。頼むぜ。」

それと、お前に仕える理由だが、お前の才の他にまだある。時期を見て話してやるから楽しみにしてな。」

「ええ、分かったわ。楽しみにしておくわ。貴方もしっかり名を上げて来なさい。」

「よし！それじゃ行って来るよ。おまえらも名を上げろよ。でねーと何処に戻ればいいかわからねーからな。」

そう言い残し、俺は愛槍の《赤光》を片手に洛陽を後にした。

蒼が洛陽を去る姿を見送った私は呟いた。

「行つたわね。」

「行きましたな。…華琳様、蒼に正直な想いを伝えなくてよかったので？」

なつ／＼、しゅ、秋蘭は何を言っているのかしら？

あたしは別にあいつの飄々とした所とか、あたしに対等な立場で喋つて来る所とか、男のくせにあたしと同じ才を持つてゐる所とかが気になつてゐるわけじゃない。／＼」

「華琳様。途中から言葉が出ていましたぞ。」

つつ。こういう所は秋蘭にかなわない気がするわ。

「コホン。今のは忘れて頂戴。それより二人共、明日からは更に励むわよ。秋蘭、貴方は今すぐ蒼の部屋に行つて彼が書いた本を取りにいきなさい。」

「「御意」」

フッフ、蒼、私達も名を上げる。ですって？面白いわ。貴方の想像以上になって驚かせてあげる。それと私に仕える理由を聞いてあげるから。楽しみにしてなさい。



#### 4話 旅立ち（後書き）

アンケート発表！といきたいのですが、新たな問題が、種馬君はだしますが、蜀ルートのいいと思ったのですが、ありきたりですか？感想で袁ルートがいいときたもんで、かなり迷っています。優柔不断ですいません。

二つ目は無かったので、こっちの勝手に動きます。

では次回から「放浪編」とします。6、7話ぐらいになると思います。

アデュー（＾Ｏ＾）／

## 5話 速さの武（前書き）

お気に入り件数が三ケタに、こんな駄文にありがとうございます。

今回から「放浪編」です。

戦闘描写はかなり難しいです。後、原作キャラはこんな感じでいいんですかね？

## 5話 速さの武

皆さんこんにちは。蒼です。

前回かつこよく洛陽を出ていったわけですが、

只今倒れています。原因は日射病。水筒の水が漏れてて水分摂取が出来ない状況に…マジで洒落にならん。ふざけている場合じゃない。目も霞んで来た。誰か助け…て…。

side 星

我が名は趙子竜、真名は星。我が武を預けるに値する主を探す旅をしている。

しかし、ひょんなことから一人ではなく、三人で行動している。

「うーん、なかなか着きませんねー。風はもう疲れました。」

「しょうがないでしょう？次の街までは遠いと言ったはずですよ。」

こう言い合っているのが私の旅の仲間だ。

のんびりしている方が名は程立、真名は風という。一見のほほんとしているが、物事の本質を見る目は私達のなかでも一番だ。

真面目な方は名を戯志才、真名は稟、しっかりとしていて、我らの世話役兼突っ込み役だ。

私か？私はこの旅の護衛役をしている。これでも一人で二人を守ってるわけだからかなり気を遣う。

「ふむ、私も風の言うことも一理あると思うが、稟、どこかに休める場所はないか？」

「全く星まで、分かりました。もう少し行けば川があります。そこまでは頑張ってください。」

よし、ならばもう少し気張ろうか。川で少し水を浴びたい。それにしてもなんという暑さだ。このままでは干からびて……ん？誰かが倒れている？

「おやー。あそこに人が倒れていませんか？」

「ええ、誰かが倒れていますね。」

私の見間違いではないようだ。

助けに向かった我々はその旅人が生きていることに一安心しつつ、彼の状態を確認すると、ただ暑さにやられただけとわかり、彼も川に連れて行くことになったのだが……

「連れていく方法がこれしかないとはいえ少し同情するな。」

運ぶ方法として荷物は稟と風で、私は彼を引きずっている。幸運なのは彼の意識が殆どないことだろう。

それにしてもこの男、持っていた赤い槍といい、鍛練していたと思われる体といい、なかなかの者と見た。是非とも手合わせてもらえないだろうか。

side out

何だか背中が痛い。それに誰かが乗っているような重苦しさを感  
じた。

また、なんだか涼しい。感覚的に木陰にすることがわかる。  
おそらく誰かに助けられたのだろう。

まず礼を言わなきゃならないなと思いつつ、目を開けると

「お！起きましたねー。お兄さん。大丈夫ですかー。私達が見つけ  
なきゃ干からびていましたよ。」

目の前には頭に人形を乗せている小さな女の子が俺に乗っかってい  
た。

「えーと。俺を助けてくれたのは君かい？その事については有り難  
いのだが、俺の上から降りてくれたら助かる。」

「助けたのは風だけの力ではないのですよー。後二人いるのですが、  
今その二人は川で水浴びをしましてそれが終わるまでは我慢し  
て欲しいのです。」

この風（恐らく真名）という子の言い草から察して、女三人で旅を  
しているのだろう。

俺はその二人が早く戻って来ることを願いつつ、木陰の涼しさを堪  
能していた。

その後、二人が戻ってくると、風という子は俺から降り、立たせて  
くれた。俺は礼を三人に礼をしつつ自己紹介をした。

「助けてくれてありがとう。あのままだと多分死んでいた。俺の名  
は李高 雲犬、好きに呼んでくれ。」

「いえ、此方は当然のことをしたまでです。私の名は戯志才と言います。」

「風は程立というのですよ。」

「私の名は趙雲 子竜と言う。李高殿は中々の武をお持ちと見える。後で手合わせを願いたい。」

驚いた。少し見ただけで非凡とわかった。そして偽名を使っているのか知らないが、あのちびっこ不思議ちゃんが程 で、眼鏡の委員長キアラが戯志才で、青髪の一癖ありそうなのが趙雲とはな。戯志才と程 が魏繋がりで一緒にいるのはわかるがまさか趙雲とね…少し探りを入れたいが、趙雲の今すぐ戦えオーラが半端ない。俺も趙雲がどれくらい強いかわかめたいが、どのくらい時間がたっているのかわからないが、腹が減っている。

「趙雲殿には、申し訳ないんだが、俺は腹が減っていてね。どうだいここで腹ごしらえをしてその後というのは？」

「ふむ、そうかならばここで食事をしと「ちょっと、星！」いいではないか。もう昼過ぎだ。」

というように戯志才を無理矢理言いくるめた。そして、食事をし、その後手合わせと言うことになった。

食事をしている時に旅をする理由が俺と大体は同じ王を探すことがわかった。（唯一の違いは俺は仕える王が決まっっていて、向こうは決まっないことだが）それと、三人は旅の途中で偶々一緒になったらしい。

食事を終えた後、戯志才と程　が審判を務め、俺と趙雲が向かい合っている。

「んじゃ、はじめますか。我が名は李高。」

「此方も、万端だぞ。

我が名は趙雲。」

「「いざ、尋常に勝負！」」

お互いの得物は槍。間合いは同じ。勝敗の行く末はいかに速く、鋭く攻撃出来るかの勝負になる。いくら某槍兵の体だとしても、相手はおそらく槍を使わせたら三国一の趙子竜だ。かなり厳しい戦いになると思ってたが……

「ハア！ハイハイハイー！どうした？避けたり防ぐだけでは勝てんぞ！その槍は飾りか？」

確かに槍の基本の動きは出来ている。しかし、槍の弱点の近距離を意識しすぎて、攻撃が雑だ。

それに速いことは速い。力強いことは強い。しかし、中途半端なのだ。速いが最速ではなく、強いが最強ではない。

「中途半端だな……」

「何？私の武が中途半端だと仰るのか？」

「そうだ。趙雲は中途半端だ。速いが、反応出来る速さだ。強いが、

防げる強さだ。」

「言わせておけば！ならば李高！貴様の武で証明しろ！」

趙雲を怒らせてしまった。だが、こんな槍が趙子竜の槍と言って欲しくない。

俺が戦いたいのは一騎当千の趙子竜だ。だから……

「教えてやるよ。一つを極めようとする武を。」

確かに速さと強さを両方を極めたら、無敵になるだろう。だが、それは不可能だ。だからこそ、人は一つを目指し、極め頂点に立つ。

趙雲との間合いを開ける。

見せてやる。これが、俺が目指す武。

「神速を、最速を目指す槍だ！」

そして俺は攻撃をする。攻撃方法は槍の真髄、刺突の一択、斬撃や打撃などの線の軌道とは違い、見切りにくい点の軌道。それに俺は今までの全ての速さを注ぎ、連続で放つ。

「くっ。」

趙雲は反応しきれていない。証拠に幾つかの傷が出来ている。

このまま倒すことは可能だが、今回の目的は一つの武の道を見せること、だから、槍を狙う！

ガッガッガッ、ガキン



「俺の勝ちだな。」

趙雲の槍を弾き、そのまま槍を趙雲の前に向ける。

「勝負ありですよ。それにしても李高さんは凄いですね。星ちゃんが一方的に負けるなんて初めて見ましたよ。」

程　が終了の宣言をする。

だが、今回の目的は俺の武を趙雲に見て、何かを感じて欲しかったのだが、よく分かってないようだ。

戦いが終わり、俺は槍を取りにいった趙雲を追いかけた。やはり、自分の武を否定されたのがショックなだろう、少し暗い。

「よう。お前の武が中途半端だという意味が分かったか？」

「それは私が弱いということですか？」

「確かに、今のあんたは弱い。武には力が必要だ。けど、槍には速さが必要だ。」

「だから、私は！」

「力と速さを両立出来るのは、一介の将までだ。必ず壁がくる。趙雲、あんたもそっじゃないのか？」

「ならば、どうすればいい？」

「それは自分で考えな。自分で出した答えが一番納得するよ。まあ、助言をやるの一つを極めてみるのがいいんじゃないのか。」

「つまり、力か、速さかというわけですか。」

お、少し分かったようだ。だがまだ何か悩んでるようだ。

「しかし、あなたは速さを極めようとしているようですが、対策を立てられた時はどうなさるおつもりか？」

「ふーん。お前はそれに悩んでるわけか。」

俺なら対策を立てられたら……」

「立てられたら？」

「今までの自分より速く、相手が対応出来ないくらい速くなればいい。それが、豪傑に必要なことだと考えてる。ま、後は自分で考えな。」

俺はそう言いつつ程　と郭嘉な所に戻っていった。

side 星

李高殿が風と稟の場所に戻っていくのを見ながら私は一人で考えていた。

立ち合いの最中、彼に中途半端と言われた時、怒りを感じた。武を志した私はある壁に悩んでいた。

それは世に残る豪傑は力がある者ばかりだった。

だから、自分も力を求めたが限界を感じた。だから足りない部分を速さで補ってきた。

その努力を中途半端と言った彼を許せなかった。

だが、それは間違いだった。彼が繰り出した刺突はあまりに速く、鋭く私に近付くことが出来なかった。

そして、同時に彼の武を見た。あまりに真っ直ぐに、あまりに速い武に魅せられた。まさに今までの豪傑と対極の存在。

そして戦いの後、彼は言った。

このままではダメだ。更にも上に行くために何かを極めると言った。恐らく彼は速さを極めたのだろう。だがそれを破られる不安はなかったのか？

だからこそ聞いた。

すると、驚く返答が来た。彼は、それならば自分を超えてみせるとそう言うて来た。その姿は余りに愚直。自分の武を信じ、また、更に上を目指そうとしていた。

私はその姿に見惚れていた。その時、私の目指す武が見えた気がした。

その後、彼はしばらく私達と旅をしたが、やることがあると言って私達と別れた。

彼と別れて私は決意した。彼に次会うときは、私の本当の武を見せようと、彼より速い武を極め見せてやろう。

李高殿、またいずれ。今度は勝たせてもらいますぞ。

## 5話 速さの武（後書き）

元々、恋姫の武将のほとんどが力の強さで戦ってるように感じたので、趙雲もそうだったのではないかとこのことで1つ。  
フラグが立ったような立ってないような……

とにかく、言いたいことは感想で。  
ではアデュー（＾Ｏ＾）ノ

## 6話 紅蓮団（前書き）

そろそろストックがなくなった。

今回は色々な所があります。

オリキャラです。モデルはマジ恋の京です。

## 6話 紅蓮団

皆さんこんにち。蒼です。趙雲達と別れて二年近くになります。今まで何をしてたかと言うと、各国を回り、客将として雇ってもらい、その地方の商人と親交を持ったり、諸侯とその臣下の才能や、性格を観たりしていた。

そして、この二年で最大の収穫は、私兵が揃ったことだ。数は、騎兵が百二十名、その他に隠密が三十名、副官の司馬懿 仲達（真名は森羅。勿論女の子だった。）こいつらは賊に襲われた村の生き残りや、名家の鼻つまみ者などだ。勿論才のない者は入れてない。最低でも一介の将となんとか渡り合うレベルの武と、その他の特技を全員に持たせてある。

今は「紅蓮団」

という名で傭兵まがいのことをしながら大陸を旅をしている。ちなみに、「紅蓮団」という名は俺の個人的な趣味で付けた。やはり前世とはいえあの熱さとドリルは忘れられない。

「で、蒼様。次は何処に向かうのですか？」

今、俺達は一つの村を賊から守り、後から来た官軍に村を譲り、他の村に向かう所だ。

で、何処に向かうか聞いてきたのが、副官の森羅だ。史実とは異なり、武もこの隊の中で俺の次であり、頭もいいので、軍師の役割をしている。

なんでも、司馬家の中が堅苦しく旅に出たらしい。

それを知り俺が勧誘した。今では、この隊の女房役になっている。

「まったく、蒼様は。女房とは、恥ずかしいではないですか。／／」

「って、地の文を読むんじゃねーよ。まったく。次、何処に行こう？華林の所にそろそろ戻るか。」

ついでに、こいつらには最終的には華林につくことは言っている。

「ああ、曹操殿ですか、つまり陳留へ？」

そう、今華林は陳留の刺史をやっていることは隠密を使って分かっている。そして善政を布いているようだ。

それにしても、森羅の華林に対する態度が敵対的に感じる。まあ目の前ではちゃんとするだろうし心配はしていないが。もう少しで仲間になるから仲良くして欲しい。

「蒼様、帰る前に涼州に行ってみませんか？」

「森羅が言うのだから、何かあるんだろう。で、どうしてだい？」

「はい。そこに董卓がいます。隠密によると善政を行っているとか。」

「本当に？」

「本当です。」

マジかよ。董卓だよ？

あの酒池肉林を体現していた人物だぞ？

女でも何処かの封 演義の姉妃さんみたいに「董卓よーん」とかいう囃しか思い浮かばない。

「董卓はどんな容姿なんだ？」

「ま、まさか、まだ見ぬ女を毒牙にかけようと…」

「違う！ふざけんじゃねーよ。」

今の世で善政を布くのは、優秀なお人好しか、優秀な野心家だけだ。

「

「そういうことですか、董卓の才に興味を？」

「まあな、前者なら仲間に出来る。そして後者なら…」

「後者なら？」

俺は笑いながら言う。正直あんまり良くない笑みを浮かべてるのは自覚する。

「俺達の敵となった時に倒しやすいように下準備をしてやるよ。」

「…蒼様、その笑みはなるべく控えて下さい。あなたの本質を知る我等ならまだしも、赤の他人なら引かれます。」

まったく、よく出来た副官だよ。痒い所まで手が届くやつだ。

本当良い女房役だな。

「だから、蒼様。女房というのは、その、恥ずかしいです。／＼」

「だから地の文を読むな！まったく、全員に通達。これより涼州に向かう。」

「御意」



森羅はこう言い残すと、休んでいる隊の皆に伝えて行つた。  
董卓さんよ、待つてな。興味が湧いた。あんたがどんな奴か判断してやる。最近賊が増えてきた。乱世が近い証拠だろう。そろそろ帰らなきゃならねえ。  
待つてな華林、董卓の所に行つたら戻つてやる。

side 森羅

私は隊の皆に涼州に向かうことを伝える為に皆の所に行く途中、さつきの蒼様の笑みを思い出す。

蒼様の性格はかなりひねくれている。  
それを分かる人なら、あの笑みは面白いことを見つけた笑みだと分かるのだが、赤の他人が見ればただのいやらしい笑みだ。

私も初めて蒼様に会い、あの笑みを見た時もうやらしい笑みだと思つていた。

私は司馬家でかなり優秀だった。しかし、司馬家は保守的だった。私が新しい事を考え、提案しても反対され、次第に司馬家の恥曝しと呼ばれるようになった。だから、旅に出ようと思い、自分を守る為の武を修め、旅に出た。

私の新しい考えを受け入れる主を探しに。  
そこで出会ったのが蒼様だった。賊に多勢で来られ苦戦している所を助けて貰った。

礼を言い、名前を言うと、あの笑みが出てきた。後で聞くと、面白い人材いたからという理由だった。

警戒しつつ話していくうちに、彼が私の求めていた主だというのが分かった。

それは彼が『常に進む人の住む国』を目指しているのを聞いたからだ。

私はこの事を空を見ながら話す蒼様に見惚れ、また、仕えようと心に決めた。

その後、私の真名を預け、また、蒼様も私に真名を預けてくれ、私は「紅蓮団」に入った。蒼様に全てをささげる覚悟で。

しかし、蒼様には仕えるべき主がいるという。その名は曹操。彼女こそが自分が求める国を作る主だと。

ただ、王の才に惚れたのならまだいいのだが、男として惚れているように見える。

曹操、貴女には女として負けません。幼なじみという有利な立場にいるようですが、蒼様の心の一番になるのは、「紅蓮団」の副官、司馬懿 仲達です。

## 6話 紅蓮団（後書き）

実際、董卓の女バージョンのイメージはこんな感じでした。（プレイして驚きました。）

話は変わりますが、FATEキャラが恋姫に入ったら一番合いそうな国はとを考えて書いてみました。

セイバー・士郎 蜀

アーチャー・凜 魏

ランサー・アサシン（小次郎）・ 呉

ギル・凜 袁

キャスター・一般人が董卓

バーサーカー・イリヤ 管理者からの蜀（士郎がいるから）

皆さんの感想もお願いします。

## 7話 歪んだ理想（前書き）

なんか勢いで書いた。  
後悔はしてない。

サブタイトルつけるのがきつい。もっといいのがある人は言うてください。

少し無理矢理な感じが。

## 7話 歪んだ理想

皆さんこんにちは。蒼です。ただいま涼州に向かっている途中です。

「蒼様、もうすぐ日が暮れます。近くの村に泊めてもらった方が宜しいかと。」

「はあ、なかなか着かねーな。」

「しょうがないです。涼州は遠いことは分かっているはずです。それに我々も疲れています。我々を乗せている馬が疲れています。馬に予備があるなら潰してもかまいませんが。」

「森羅、お前分かってて言うてるだろ。俺等は貧乏だしそれに、馬を道具としては見ていない。こいつらは相棒だろ。」

「なら諦めることです。」

森羅は自分の思っていないことを言う。それはありがたいのだが、あんまり悪役にならなくてもいいと思う。少し、甘いな。

「分かってる。これは愚痴だよ。涼州に行くにはどのくらいで着くかくらいは予測してる。」

後、そう悪役ぶるなよ。俺がそう見られるのはまだ許せるが、仲間がそう見られるのはなんか嫌だからな。」

「っ、分かりました。なるべくは抑えますが性分ですから、たまには出てきますのでご容赦を。…ずるいですね。まったく。／／」

最後の方が聞こえないが、まあいい。それより泊めてもらえる村を探さないとな。

ようやく村を見つけたが、少しおかしい。なんだか空気が張り詰めている。まるで何かを警戒するような。

「森羅」

「分かっています。全員警戒！そして牙門旗を上げろ！

そして、隠密部隊から二、三人出して我々が行くことを村に伝えよ！その間、ここで待機！」

隠密が村に伝えている間、俺達は回りを警戒していた。

「なあ森羅、これは厄介ごとの予感がするんだが。」

「ええ、私も同じように感じています。しかし、見捨てはしないでしよう？」

「まあな、……あーあ、面倒くせー。何処か落ち着ける村はない……よな。」

「まあ今は乱世の一手手前ですから。諦めて下さい。」

警戒し過ぎないように軽い会話を各自交わす。それでも気は抜かない。

その後、何事も起こらず、隠密が帰ってきた。なんでも、もうすぐ賊が村に来るらしく。逃げるか、戦うかで意見が割れているらしい。俺達は取り敢えず、村に入ることにした。

村に入った俺達は兵達を休めさせ、この村の長に会う為に、俺が森羅を伴い、向かうと、旅人らしい人物三人が長達と言い合いをしていた。

「なあ森羅、あれは旅人だよな？」

「おそらくその通りかと、村の服装ではありませんし、それに後ろの二人は強い武を持っているようです。」

俺も同じ考えだという意味で頷く。

三人の内、村人達と喋っている天然のような奴の後ろにいる二人、一人はチビ、一人は黒髪サイドテール。この二人の武の才は非凡だと一目で分かった。

おそらく、あの天然を自分の主だとして認めているのだろう。

少し、天然に興味が湧いたので、話を聞いてみると、村人達は残って戦うから、協力してくれと言っていて、天然は命を大事にして欲しいから逃げると言っていた。

何も状況がわからない奴が聞くと、旅人が正しいように思えるが、状況を考えると村人達のほうが正しいように思える。

「話し合いの途中だがいいかい？」

「何者ですか。貴方達は。」

「さっき連絡があったと思うが、俺は傭兵集団『紅蓮団』の長、李高だ。そしてこいつが副官の司馬懿だ。」

このままだと、話が平行線をたどる一方のような気がして話に割り込まして貰った。というか傭兵と聞いただけで眉をひそめるのはやめてくれないかな、旅人衆。少しム力つくから。

「取り敢えず、さっきの話は聞いてみたが、俺は村の人達に賛成だ。」

「なんでですか！戦うと皆死んでしまいかもしれないですよ！」

「すまねーが、名前を覚えてもらえねーか？」

「私は劉備 玄德と言います。そして後ろにいるのが…」

「…関羽 雲長だ」

「鈴々は張飛 翼徳っていうのだ。」

へえー、天然が劉備で、サイドテールが関羽、チビが張飛か。凄いお人好しオーラが出ているな。

「それで、なんで李高さんは戦うべきだと思ったんですか？」

「まあ、色々あるが……」

まず一つ、賊について詳しいことが分からないが、大体は逃げている最中に追い付かれてやられるのがオチだ。村人には馬がないから遅いだろう。それに俺の軍を使っただとしても百程度だから、全てを



守り切れない。

で、二つ、もし逃げれたとしても逃げた場所にまた賊が来たらどうする？だから今、徹底的に賊を倒した方がいいと考えてる。

そして、これが最後だが、この村は村人達の物だ。余所からあんまり首を突っ込むことは野暮だと思うがどう思う？」

「……………」

沈黙かよまったく。これがあの劉備かよ？

「ま、そういうことだ。

それでだ長よ。賊の状況次第であんたに手を貸そう。教えて欲しいのは、勢力、本拠地、後、練度だ。」

「数は、約千五百。全員が官軍くずれです。本拠地は1日もたたずに着く場所に皆があります。どうでしょうか、我々に力を貸して頂けないでしょうか。」

「劉備、てめえらはどうすんだ？」

「…私達も戦います。愛紗ちゃんも鈴々ちゃんもいいよね。」

「勿論です。（なのだ。）」「

「よし、村長さんよ。こいつらも協力してやるそうだ。俺等も協力してやる。」

「あ、ありがとうございます。」

「ふう、森羅。お前は長と計画を練れ、それとなるべく早く隠密隊

に本拠地を探らせる。無理はさせんな。」

「御意。」

「じゃあな。俺は少し寝る。あ、後、報酬は飯で頼む。まあ、俺達がいる間でいい。俺達は貧乏なんだね。」

こうして俺は仲間の下に帰って行った。

後で釣りでもすっかな。

side 桃香

私たちは司馬懿さんと村長さんと賊について話し合った。結局は戦略と指揮は李高さん達に任せることになった。

「桃香様！どうしてあの傭兵に任せたりしたのです。私は傭兵という者は好きになれません。」

「それは言い過ぎだよ愛紗ちゃん。それに李高さんって何時もの傭兵さん、ていう感じがしないし。」

「まったく、桃香様は甘過ぎます。」

「そうなのだ。お姉ちゃんも甘過ぎるのだ。」

うー。確かにその通りだけどはつきり言われたらへこむなー。

けど、李高さんはお金の為じゃなくて、私達みたいに自分の信念で

動いているように見えたな。

「桃香様、もしそうだとしても、私にはただの戦いたいだけの男に見えました。」

確かに、私もそこは疑問に思っている。

だから、李高さんに聞いてみよう。話し合うことでわかりあえるはずだから。愛紗ちゃんと鈴々ちゃんには反対されるかもしれないけど、それでも私は話をしてみたかった。

そして、一人で李高さんの元に行ってみた。

「あのー。」

「ん、誰だ？」

「私です！劉備ですよ。」

「ああそうかい。でなんか用かい？できるなら静かにしてくれ。魚が逃げちまう。」

飄々と釣りをしながら返事をする李高さん。

けど、ただ釣りをしているわけじゃないようだった。

「えーと、用というか少しお話してみたいなーと思って。それよりよくそんな鉄の釣竿を動かさず腕だけで持てますね。というかなんと釣りなんかをやってるんですか？」

「まあ鍛練と趣味を同時にできるからだな、それに、これぐらい鍛えなきゃ生き残れなかったんだよ。」

で、本題はなんだ？俺は回りくどいのは苦手なんだ。」

何だか、李高さんの気配が怖くなってきた。これが愛紗ちゃんかが言う。殺気が膨れ上がるということかな？

「えーと、どうして李高さんは村の人達に戦うことに賛成したのかなーって。」

「逆に聞くんが、どうして村人達の言っていることを否定した？」

「え、それは勿論誰にも死んで欲しくなかったから。」

そう、皆が笑って暮らせる世の中にしたい。それが私の夢だから。

「なら、村人達の意志はどうなる？」

「そんなの生き残らないと意味がないじゃないですか？」

「意味がないだと？」

さっきまで釣竿を見ていた李高さんがこっちを見てきた。更に怖くなっただけ、勇気を振り絞り答える。

「はい。そうです。」

「てめえ……まあいいや。例え話をしてやる。」

ある所々に死んでも譲れない物を持つ者がいる。しかし、それを渡さないと必ず殺される。さて、お前ならどうする？」

「それは勿論渡します。」

「それで心が死んでもか？」

李高さんの目が怖い。

けど、怖いけど聞かなきゃならないことと本能的に分かる。

「人には必ず一つは譲れないもの、又は失いたくないものがある。お前にも俺にもだ。

もしそれをなくしたら、人は心を失い、ただの人形になっちゃう。心がないからなんにも感じないからな。つまり、心が死んだら命があっても意味がないってことだ。言い方を変えると、『意志があるからこそ人間』ということだ。

でだ、ここの村人達は此処にのこる意志を示した。これは俺の勝手な解釈だが、村人達の譲れないものがこの村自体か、もしくは村にあるんだろうよ。だから俺は戦いに賛同した。だからな嬢ちゃん。余所者の俺達はその決断に協力することしか出来ないんだよ。」

確かにそうかもしれない。心が死んだら意味がないのかもしれない。

「だけど、私は命を救いたいんです！」

李高さんは少し驚いたような呆れた表情で私を見た後、いきなり聞いてきました。

「嬢ちゃん。あんたの理想はなんだい？あの二人も嬢ちゃん理想に着いていつてんだろ？」

「えっ、どうして分かるんですか？」

「それでも、人の上に立っているからな。これぐらいはできないと

な。

で、嬢ちゃんの理想はなんだい？」

「私の理想は皆が笑って暮らせる世の中にあることです。争いもなく話し合いでわかりあえる世の中にする。これが私の理想です。」

なんだか私の理想を聞いた後、李高さんの気配が鋭くなっている。そして、李高さんはそのまま自分の荷物を持って帰り始める。そして歩き始める前にこう行って来た。

「嬢ちゃん。はっきり言おう。その理想は綺麗だが歪んでるよ。たとえ正しくても、今の時代では間違った考えだ。」

だが、初めからなんでは聞くな。人の上に立つ奴は自分で答えを見つけるよう努力すべきだ。特にあんたは人を惹き付ける才がある。これから人も人が集まるだろう。だから答えは自分で見つけるよう努力するべきだ。そして周りを頼れ。」

最後にもう一度言おう。嬢ちゃんの理想は歪んでる。」

そう言いながら李高さんは戻っていきました。

私はそれを黙って見るしかありませんでした。

あの人の言葉が頭に残っていました。

その後、帰って来ると、愛紗ちゃんに見つかり説教を受けながら、考えてしまいました。あの人が言った自分の理想の歪みの答えを。

## 7話 歪んだ理想（後書き）

どうも、劉備は種馬と絡ませて本格的なアンチになります。

1話で終わらせる予定でしたが、2、3話ぐらいになります。

一応、種馬は蜀ルートで。色々考えてますから面白くなるようにうごかしますが。

このままいくとメインの華林がしばらく空気に……番外でも書いてみます。

あと、華雄さんの真名を募集します。全然思い浮かばない。出来れば理由も書いてください。

では次回。

## 8話 賊との戦いの前（前書き）

どうも、なんか書けたので出します。  
相変わらずネーミングセンスも文才もない。

こうすればいいなんていうのもどしどし下さい。  
自分は自分の文に自信がないので……。

後、キャラが崩れてるような……  
それでは！



## 8話 賊との戦いの前

嬢ちゃんと話をした次の日、戦える人達を集めるため部下を使って呼び出しているのだが、やはり数が少ない。数は紅蓮団を除き、約四百程、武装もかなり貧弱だ。

「なあ、森羅。これは皆を逃がした方がいいかもな……。」

「私もそれは考えてしまいましたが、あの劉備に宣言してしまった以上やらなくてはなりません。」

因みに、嬢ちゃんとの会話の内容は森羅にも言っている。

「それにしても、かなり厳しくなりそうだな。はあ、心が重いよまったく。」

「しかし、それでは劉備の理想に負けたということになります。それに私の考えた策があります。安心して下さい。」

「あれのどこが安心出来んだよ！明日に来るとはいえ、大部分俺に丸投げだろ！」

「しかし、それが最も被害が少なく、かつ、一番勝ちに行ける策だと考えます。」

策の内容はこうだ。襲撃の準備中に俺が単騎で砦に突入、打ち漏らしを紅蓮団三十程が倒し、保険に森羅が指揮する紅蓮団含む五百程度で村を防衛というスパロボ顔負けの『少数精鋭（単騎）』による敵

の殲滅』という単純な策だった。

最初は無理だといったのだが、この策を聞いていた紅蓮団のメンバーが「面倒くさがるな」とか、「俺達の上にいるんだから全部やってくれ」とか言われて、実際出来るからと渋々承知された。

そんなことを考えている内に全員に森羅が策を教えたようだ。

「蒼様、指示を。」

「あいよ、分かってる。」

此処でいう指示は、士気を上げる宣言みたいな物だ。俺は馬を中央まで寄せ、全員の顔を見ながらいう。

「全員聞け！策は聞いただろうが、恐らく村に賊がくるだろう。具体的な指示は村に置く指揮者に聞け。

俺は最低限の命令を下す。死ぬな！死にそうになったら逃げろ！それで隠れる！で、隙を見つけたらぶっ殺せ！」

自分が気に入っている神狩りの隊長の台詞を借りる。まあ、皆口を開けて驚いてやがる。

紅蓮団には毎回戦う前には言っているから耐性はあるが、他の奴はないからな。

「いきなりそんな事を言われて驚くのは分かる。ま、とにかく言いたいのは、生き延びろ！戦いは最終的には生の執着が強い奴が勝つからな！分かったな？」

こう言い終わると、少し間を開けて雄叫びが聞こえる。俺はそのまま

ま一緒に砦に向かう兵の所に行く。

「すまないな。かなりの貧乏くじだが諦めてくれ。」

「いやいや、隊長が全部やってくれるでしょ？それにあんなに厳しく訓練したんだ。なかなか死ねませんよ。」

そう笑いつつ軽く会話をしながら砦に向かうため村を出ようとしていきなり前を関羽に塞がれた。

「いきなりなんだ？関羽。さっきの策は聞いただろ？なんか言いたいことでもあんのか？」

「ああ、そうだ。私も連れて行け！李高！」

そう言われ少し驚く、確かに関羽程の豪傑が加わると俺達の生存率は上がる。だがこいつは嬢ちゃんの部下だ。勝手に死地に連れていけない。

「少し聞きたいが、嬢ちゃん…劉備はお前が行くことを許可したのか？」

「ああ、そうだ。」

「だが、死ぬかもしれないがいいのか？」

「お前達は知らんが、私は生き延びてやる。」

そう言いつつ俺の目を見る。こいつの目は覚悟を決めるどころか俺を見極めようとしている目だった。

今、目の前に傭兵の李高がいる。

李高 雲犬、奴は初対面からどこか恐ろしかった。

今まで会ってきた傭兵は己の命や金の為にどんなに汚いこともやっていた連中ばかりで、すぐ思考が読める。

だが、この男は違う。アイツは名の一部のような雲を想像させ、思考が読めない。

途中までは、ただ戦いたいだけの男に見えた。

けれど、桃香様の理想を否定したと聞いて、また、先ほどの指示を聞き、奴は何かの理想を持って傭兵をやっているように見えた。

だから、桃香様に無理を言い、李高に着いていき、奴の人と為りを見極めようと思った。

「ククク、ハハハハ！」

「何がおかしい！」

「いや、そんなに怒るんじゃないよ。

うし、合格だよ。俺を見極めようとする目が気に入った。

関羽、お前は俺に着いてきな。」

取り敢えずは連れて行ってくれるようだ。

すると、打って変わって思わず構えそうになる殺気を放ちながら言うてきた。

「ただし、攻める俺達はもう一つ守る指示がある。

…『見敵必殺』だ。情けをかけるな。俺達はただ此処の村人達の為

に殺す。全員殺す。必ず守れ。いいな。」

「わ、わかった。」

「よし、とつとと掃除をするぞ。こんなところで立ち止まる暇は個人的にないからな。」

先ほどまで出していた威圧を直ぐに引つ込み軽い口調で私達を率いる。

おそらく、この二面性が李高の本質なのではないかと思う。そして、それを確信させるためにも更に見極めなければ。

## 8話 賊との戦いの前（後書き）

関羽は最初に会った主に影響されがちな印象があるのは自分だけで  
しょうか？

神狩りのリン ウ隊長はかなり好きなキャラです。

華雄の真名を自分でも考えました。その他にもパッチーさんから  
来ました。ありがとうございます。

パッチーさん  
月影

と・うききとが  
兎、兎牙、兎角  
とかく

兎関連は作者の案です。月といえば兎というかんじです。参考程度  
に見てください。

一応、真名アンケートは後2、3話ぐらいで締め切ります。バシバ  
シ出してください。

次回は長くなる予定なので、少し遅くなります。  
では！（＾＾ゞ

## 9話 賊との戦い その後（前書き）

なんか、データが飛んだりしてやる気がた落ちしてしまいました。  
うーん、戦闘描写がうまく書けない。

アドバイスお願いします。アンケートは次の投稿までです。

キャラ崩壊等があるぞ？いいな？いいんだな？

駄文です。

## 9話 賊との戦い その後

砦に向かう途中、見られ続けることがいやになった俺は関羽にふざけ半分で話しかけた。

「なあ、関羽。いつまでも俺に熱い視線を向けるなよ。照れるだろうが。」

「な、な、ふざけるな！私はお前などに興味はない！」

「いやー、初心<sup>ウツ</sup>だねー。」

つと、冗談はこのくらいにしてだな。

なんか俺に聞きたいことあんだろ？」

まあ、関羽のことだどうせ昨夜の嬢ちゃんと俺の会話の内容を知って、俺の人となり調べようって腹なんだろう。

「その通りだ。ならば単刀直入に聞くが、なぜ桃香様の理想が間違ってると言った？」

「そりゃ当たり前だろ？」

「なんだと！貴様！」

関羽は怒りながら自分の獲物を向けてくる。つたく、しゃーねー少し説明してやるか。

「なあ、関羽。お前は少しはこの世の中を知ってるようだから名前



でよんでやる。嬢ちゃん…劉備のことな。確か理想の内容は「皆が笑って暮らせる世の中で争いもなく話し合いでわかりあえる世の中」だったよな？」

「ああ、そうだ。」

「まあ、笑って暮らせる世つてのはまだいい。だが、争いもなく話し合いでわかりあえる世つてのはいけねえ。」

「何故だ？」

「お前は分かっているはずだぜ。関羽。話し合いでわかりあえるならこんな状況になつてなかったよ。」

あのな関羽、人は他人と同じことを常に思えるわけがない。だからこそお互いにわかり合う為に話し合う。けど関羽、もしお前が武を否定されたらどうする？」

「それは勿論、我が武にかけてその考えを……」

「ほらな、結局力任せに相手を従わせる。これが争いの縮図だよ。争いは国と国との喧嘩だ。」

人は意志を持つから人であり、意志を曲げないために争う。

争いは一種の行事だ。勝者が敗者を従わせ、1つになる。それが繰り返しているのが歴史だ。」

今までの歴史も争いがない国などなかった。前の世界でもなにかしらの理由で争いはある。

「なら、桃香様の掲げている理想は間違っている？」

「違う。歪なんだよ。」

言ってることは正しい。正しいが、ただなくしたいと言っべきじゃない。それにその理想を掲げつつ武力を使うのは間違ってる。」

そう、やるならば前世のガンジーのように無抵抗で戦うべきだ。

「…だが、私達は正義を掲げて戦っている。」

正義を掲げて、ね。

「ま、理想は人それぞれだ。とにかく少し俺の考えを頭に入れて進んだ方が良く。ただし、正義を信じるのはいい。だが、戦いに正義を持ち出すのはやめろ。」

「何故だ？私達は弱い者を守る為に戦うのに。」

「戦いという大量殺人の真相を正義というもので覆い隠さない為に。」

戦いはどれだけ言い繕っても、所詮人殺しだ。だから俺は戦で正義を語りたくない。

関羽は俺の言葉を聞いて押し黙った。いきなり自分の信じる正義を否定されて反論出来ないようだ。少し言い過ぎたかな。

「まあ、俺の考えは極論だ。気にすんな。」

そう言いつつ近づく戦の気配に気を張りつつ、関羽との話を切った。

『戦いという大量殺人の真相を正義というもので覆い隠さない為に。』

今、私の頭にこの言葉が巡っている。

それを語っていた時の李高の顔には見覚えがあった。初めて人を殺した時の顔だ。

恐らく、私のように李高は賊だから仕方がないなどと割り切らず、自分が人殺しをしたという事実をただ受け止めている。

彼は戦いを肯定しているが殺したくはないのだろう。

なぜなら戦いは敵も味方も死ぬのだから。

なら、彼はどのような死に様を望むのだろうか。私達は桃香様の理想のために死ぬのだから死すらも誇りに感じるかもしれないが。

「李高。最後に聞きたい。貴様は戦場で死ぬのならどのように死ぬ。」

「そうだな、これは俺達『紅蓮団』の総意だが。」

こういつつ、彼は笑顔で此方を向く。

「俺達は戦場で『畜生！畜生！』と言いながら腹に風穴空けられるなり、斜めに切られたりしてのた打ち回りながら死んでいくんだろうよ。ま、簡単に死ぬつもりはないがな。」

その言葉を聞きつつ、息を飲んだ。何故なら彼の笑みは狂気の類いではなく、一人の武人が死を覚悟した時にする笑みだった。

よく周りを見て見ると、彼の部下もその笑みを浮かべていた。

これは素直に羨ましい。薄々気付いていたが、この傭兵達は官軍よりも誇り高く、また上を信頼している。私もこのような軍を率いて

みたいと素直に感じてしまう。  
そんな風に考えている内に賊の砦に着いた。

「よし、俺が突っ込んだ後は手筈通りに零れた奴らを頼む。」

作戦の内容は聞いている。李高、貴様の思いは分かった。桃香様の為にも後は、貴様の武を見せてもらう。

s i d e   o u t

ようやく砦に着いた。隠密に確認した通り、出入口は1つに絞っているようだ。

俺は気付かれない所で一度止まり、後ろを見る。

俺の部下は勿論、さっきまで思案顔の関羽でさえもちゃんと武人になっている。

「おし、お前ら。今からあそこの賊を狩る。

いいな。今から俺達がやるのは『殺し合い』じゃない一方的な『殺戮』だ。

命令は変わらん。『見敵必殺』。以上だ。

零れたのは頼むぜ。」

そう言いつつ一人片手で槍を構え突撃して行く。

門番を問答無用で殺し、馬を降りる。

中を伺うと、賊達は俺に気が付いた。

どうやら明日の襲撃に備えて準備をしていたようだ。

「なんだてめえ。」

「何、俺達の仲間殺してんだ？自殺希望か？キャハハハハ！」

こう言いながら俺を囲む賊どもを見ながら。笑顔を浮かべ、宣言する。

「聞け！糞共！俺の名は李高！とある村からの依頼で掃除に来た！だからよ。てめえら死にたくなけりや俺を殺してみな。」

言い終えると同時に賊は怒ったのか俺を囲み突っ込んで来た。此処で受けに回るのは悪手、だからすべて攻めの一手で乗り切る。

「邪魔だ！」

こう叫びつつ槍を振るう。振るうごとに賊が吹き飛ばされている。運良く生きていても起き上がれない状況だろう。そいつらの相手は関羽達に任せるとして、とっとと全滅させますか。

「くそつ。来るな化け物。」

そう言いつつ腰が抜けたのかへたりこみながら剣を滅茶苦茶に振るう最後の一人に近づく。

いやー、緊張した。賊ごときに死ぬわけないと思っても初めての一对多の戦いだから焦るよな。

そんなことを思いつつ目の前のこいつをどうすっかなー。なんて考えていると関羽と部下がこっちに向かって来た。

「隊長、やっぱりすごいですねー、あれだけ相手に息一つ乱れてな

いいし、傷もない。どれだけ化け物なんですかあんた？」

「うるせーよ。俺はお前達の隊長だぞ。これぐらい出来ないとお前達に舐められるわ。」

それより、ちゃんと皆生きてんな？」

「勿論ですよ。軽傷者はいますが、伊達に隊長に鍛えられてないですからね。」

その返事を聞き、少し安心したのは悪くないと思う。いくら鍛えたからといって、戦は何が起るか分からない。どんなに強い奴でも偶然死んでしまうこともある。

「て、てめえ！俺を無視すんじゃない！」

は。全く死にたくないんだったら今の内に逃げるとかなんかあるだろう？

俺も忘れかけてたからもしかしたら逃げられたかもしれないのに。

「あー、すまん忘れてた。今すぐ殺してもいいが、もう少し生きて貰えるか？」

そう言いつつ、石突きで気絶させる。

「よし、後始末だ。お前達は武具及び、食糧の確保。その後、火をかける。」

俺と関羽はこいつを縛って門の所にいる。」

「了解」

部下達が、後始末をしている間に俺と関羽は一人の捕虜を連れて、門の前に来ている。

「李高、こいつをどうするのだ？まさか生かして逃がすわけではあるまいな？」

「おいおい、おれは『見敵必殺』と言ったはずだぜ。こいつは賊を全員殺したことの証明に皆の目の前で殺すだけだ。」

「…貴様は何時もこんなことをしているのか。」

「何時もつてわけじゃないがな。」

ま、理由は村人を安心させるためと、ちゃんと始末したと伝えるためだな。

俺達は傭兵つてだけで信用しない奴らがいるもんでね。」

少し嫌味が入ったがまあいいだろう。

それよりあいつら遅いな残党が残っていてもてこずるやつらじゃないし、今回は数が多いから時間がかかってんだろうな。と思っていると、関羽が口を開いた。

「李高、お前の目指している物がなんなのかは分からない。だが、今の桃香様の考えとは合わないだろう。しかし、それを承知で頼む！桃香様に力を貸してくれないか？」

「断る。理由は色々あるが一番の理由は嬢ちゃんは上に立つ覚悟がない。」

「……………」

おっ、怒りを抑えているのかは分からないが、自分の武器を向けなくなった。

これは成長しているのだろうか？分からないが話を続ける。

「関羽、戦で一番血に汚れているのは誰だと思う。

人は兵士とか、一番多く殺した武将とか言うだろうが、俺が一番上の存在、つまり主君だと考えてる。

だってそうだろう？主君の言葉で戦いが始まり、敵も味方も死んでいくんだから。だからこそ主君になるべき者は死んでいった者の責を負い進む覚悟が必要だ。

だが、嬢ちゃんにはその覚悟もなくただ理想を振りかざすだけ。そんな奴の下に付きたくない。」

「そうか、分かった。今の忠告は心に留めておこう。」

薄々感じていたがこいつは劉備の理性だ。今はまだ未熟だが必ずそうなる。

だから少しサービスしてやる。

「おう、そうしろ。だがこれは嬢ちゃん自身が自覚しなきゃいけないことだ。

そしてこいつは助言だ。関羽、そしてそれを嬢ちゃんが自覚した時はお前達が下から理解し、支える。それが義務だ。」

「分かった。すまない。傭兵だと侮っていたが、色々教えられた。」

そう礼を言われ、照れ臭くなった時に、いいタイミングで部下達が帰ってきた。その後、火が砦に回っているのを確認し、村に戻り、最後の一人を殺した。



夜、祝勝の宴の後に皆から持ち出した物資をどう分けるかで話し合い。翌朝に出ることになった。

「蒼様、準備が整いました。」

「よし、そんじゃあ涼州にしゅっ「李高さん！」って嬢ちゃん。どうした？着いてくんのか？」

意気揚々と出発しようとしたら嬢ちゃんに止められた。

「違います。お礼と決意を伝えに来ました。」

森羅が訝しげに見ているが俺は少し興味が湧いた。

「悪いが、率直に言ってくれ、こっちにも事情があるからな。」

「分かりました。物資をありがとうございます。  
それからまだ私は李高さんが言う。理想の歪みの答えはわかりません。けど次に会う時までには答えを出します。」

いい顔だ。これなら答えを見つけるのも容易いだろう。

「分かった。じゃあ次を楽しみにしておくよ。じゃあな劉備。」

「よろしいのですか？蒼様。」

「なにがだ。」

「劉備のことです。彼女は曹操と相入れぬ存在かと。その成長を促すとは

…はっ、まさか劉備達も手ごめにするつもりですか？  
くっ、私という者がありながら／＼」

「馬鹿かお前は！誰が誰をてごめにしたって？」

「それは勿論蒼様が私をてごめに…言わせないでください！／＼」

「薄々感じていたが、お前。俺が絡むと人格が変わらないか？

はあ、まあいいや。理由は簡単。劉備には悪いが、華琳の踏み台の一つになってもらう。」

「曹操を王として更なる高みに昇らせる為ですか。」

「そう、あいつはその高みにたどり着く資格がある。あいつなら俺達の望む世界が作れる。

動き出したらかなり忙しくなるし、死ぬかもしれないが着いてくるか？」

「いまさらです。私は曹操ではなく、蒼様、貴方に命を預けました。好きなように使ってください。

特に肉体的欲求の為に使っただけなら大歓迎です。／＼」

「まあ、最後は冗談として。涼州にとつとて行くぞ。」

と劉備の答えに期待しながら涼州に馬を向けた。

その時、俺は次に会った時の劉備の驚くべき回答など想像して  
いなかった。

## 9話 賊との戦い その後（後書き）

この後の展開は予想がつくと思いますが、皆さんの心の内に置いていてください。

次回は華琳さんの閑話になると思います。

アドバイスをお願いします。

皆、オラに元気（感想）を分けてくれ。  
では次回（^^ゞ

閑話 出会い（理想の始まり）（前書き）

いや、すいません。

少し遅くなりました。

今回は全て華琳sideでお送りしております。

なんだか、桂花が軽いような。

## 閑話 出会い（理想の始まり）

今、私は一人洛陽の近くの森の中にいる。

何故こんな所にいるかというと、気分転換の為だ。

昔から天才や神童等呼ばれ、そして次期曹家当主として世間に認知されてから気の抜ける暇がほとんどない。

偶に春蘭、秋蘭と話したりもして気分転換もしているけど二人とも私塾に通ってないから何時もというわけではない。

だから、一人の時はこうして近くの森や川に行くわけだけど…

「どうして貴方が此処にいるのかしら？」

目の前には釣りをしている李高がいた。

李高、昔は男でありながら神童と呼ばれ、私塾に入った人物。

しかし、私塾に入ったものの、すぐ抜け出したり、寝てたり、賭け事をしていて呼ばれ始めたあだ名は『落ちこぼれ』等の不名誉な物ばかり。

「ん？その声は曹操か。」

いやなこちら辺がよく釣れると聞いたからさ、試しに釣ってみよう  
て思ってた。お前もやるか？」

「残念だけど私はそんな趣味はないの。見た所いいのが釣れてない  
ようね？諦めたら？」

「いやーきついね。だがもう少し粘るよ。分の悪い賭けは嫌いじゃない  
いんでね。」

本当にこの男の飄々とした話し方を聞いてるとなぜだかイライラしてしまう。

まったく、麗羽や曹家に擦り寄ろうとする連中から離れたと思った  
らこの男と会うなんてね。

そもそも男というので信用できない。顔はそこそ良いようだけれどそれだけに感じられる。

それに神童と呼ばれていたのだから何か優れた資質があつたのでしようけれど、それを伸ばさないのも腹が立つ原因だ。

「はあ、もういいわ勝手にしなさい。じゃあね。」

「そうかい。……あつ。そうだ。このあたり、近頃なんだか物騒だからな。気を付けて帰れよ。」

私は李高に別れを告げて、落ち着ける場所を探しに行った。

途中、李高が何か言ってきたけど良く聞こえないから無視した。

「そろそろ戻ろうかしら。」

そろそろ日が暮れるころ、私はふと気になって李高の所に行こうとした。

あいつがちゃんと釣れているかどうか少し興味があるしね。

そして李高が釣りをしていた所には李高だけではなく3人の賊がいて剣を片手にアイツを脅していた。

自分で注意しといて不様ね。

「釣りをしているとところすまねえが、身ぐるみ全部置いてって貰おうか。」

「へへへ、そうだぜ。死にたくなければ全部置いていけ。」

「死にたくなければ、無駄な抵抗はやめるんだな。」

「いやー、皆さん落ち着いて、落ち着いて。平和に、話し合いで解決しましょう。痛いのはいやですからね。…と言っわけで見逃して「ふざけるな！」貰えるわけないですよ。」

はあ、呆れた。賊相手に話し合いなんて出来るわけじゃない。けれど何かおかしい。普通は賊が目の前にそれに複数いたら男は大体怯えるのだけど、アイツはそんな感じには見られない。あの目は怯えてる目じゃなくむしろ見逃してやるという感じだ。少し面白くなってきたわね。すぐに飛び出して助けようと思ったけどもう少し様子を見ていてもいいかもしれない。

「へっ、臆病者が。まあいいや、おい！お前らとつとこいつ殺して持つてるもん全部かつぱらうぞ。」

「「へい！」」

「あーあ、こっちは面倒くさいし、今は、あんまり人を殺したくないし、力を見せたくないんだけどな。しょうがないか。あんたらの事情は知らねーけど…死んでくれ。」

アイツはそう言いつつ、傍に置いてあった赤い棒を持って殺気を出



す。

私はその殺気を感じた時、向けられてないのに怖いと感じてしまった。

そこにいたのは周りに『落ちこぼれ』と言われ続けた凡人ではなく、今まで会った中で一番の才の輝きを持つ『武人』としての李高がいた。

「ふ、雰囲気を変えたぐらいで俺達がびびるわけないだろ。やつちまうぞてめえら。」

その声を合図に賊達が剣を片手に突っ込んでくる。

それに対して李高は構えるだけ。しかしよく見ると赤い棒と思っていた物の端には槍の刃と石突きがあり、全て赤く塗られた槍だとわかる。

そしてその構えは通常の構えより低く、例えるなら獲物を狙う猫、そして隙がない。

そして…

「しっ！」ドスドスドス

槍を突いた。そして構え直すと同時に賊が3人全員が倒れる。

アイツがしたことは極めて単純ただ三度突いただけ。けどその突きは余りに速いものだった。

そしてその姿に見惚れてしまう自分がいる。

「で、なんか用かい？曹操さん？」

っ、気付かれた。いえ、始めから気付いていたのでしょっね。

出来る限り気配を消していたというのに流石ね。

恐らく今の姿が李高という男の真の姿。あの武を見てしまった以上

どうしても欲しい。

「あら、ごめんなさい。少し興味深い物を見ようとしたのだけれど……邪魔だったかしら。」

「いや、見てたのなら助けるよ。」

俺はこれでも面倒くさがりやのことなけれ主義の人間なんでね。」

「誤魔化すことはやめなさい。」

まさか今の殺気と武が火事場の馬鹿力とか言わないでしょうね。」

「いやー、こっちはそう言いたかったんだけど……。  
今のことなかったことにしてくれないか？」

「いいけど、一つだけ条件があるわ。  
私の物になりなさい。」

「……だから面倒くさいんだよ。  
……しょうがない。曹操、あんたの理想を教えろ。」

あの目、そして雰囲気、私を試すつもり？  
面白いじゃない。

「いいわ。教えてあげる。我が理想は霸道を進み、天下を統一して、  
民が安心して暮らせるような世を作る。  
どう、満足かしら？」

そう返すと李高は驚き、顔をうつむかせ、黙ってしまった。けど、  
よく見ると震えている。  
おそらく笑っているのだろう。

「…馬鹿にしているのかしら？」

「ククク…いやすまない。まさか曹操、お前から…  
ハハハハ！もう無理だ！我慢出来ねえ！

いやまさかアイツから聞くと思つてたものを、まさかお前から聞けるとはな。まったく。予想外にも程がある。

いや、合格だ。合格だよ曹孟徳。

悪くない。ああそうだ。悪くない気分だ。」

そう笑いながら話す李高はまるで探していたものを見つけた子供も  
のような雰囲気だった。

「とまあおふざけはここまでで、少し質問だ。

曹操、戦で一番血を被る奴は誰だと思う。」

「当然、私達命令を下す上にいる人物よ。」

何を当たり前のことを聞くのかしら。

だけど、これは一種の評価を下す質問なのだろう。

答えを聞いた李高は満足気な顔を浮かべ、槍を横に下ろし、私の前  
にひざまついた。

「我が名は李高 雲犬。真名は蒼。我が目指す理想は『常に前に進  
む人の住む国』だ。曹操、あんたならそんな国を作るだろう。

我が槍と我が真名、そして我が理想をお前の理想に捧げ、また支え  
きれない重荷は共に支えよう。

最後にお前はただ『戦え』と言え。

ならば俺はお前の為に槍を振るおう。」

そう宣言する蒼に思わず見惚れてしまったのも悪くはない。  
まったく、元々、男には真名を預けないと思ってただけど、今の蒼に  
なら預けてもいいわね。

「わかった。私の真名も預けるわ。私の真名は華琳よ。これからは  
私の為に武を振るいなさい。」

こうして私は蒼と会い、共に歩み始めた。

「琳様。華琳様。」

「あら秋蘭、ごめんなさいね。少し思い出に浸っていたわ。  
それで桂花、新しい警備体制を布いてから治安はどうかしら?」

「はっ。例の区分された警備の制度ですが、成果を上げているよう  
です。」

苟、真名は桂花。初対面で私を試した可愛い娘。  
今は私の軍師となつて働いてくれている。

それにしても蒼が残した本は良く出来ているの一言だ。内容はどの  
本にも書かれておらず、革新的なものまである。さっき言っていた  
治安計画もこの本の内容だ。

「良くやったわ。桂花。あとで、ご褒美を上げる。」

「か、華琳様。」

ふふふ、本当に可愛い娘。

蒼、貴方の噂は此処まで来ているわ。

民にはただの傭兵としか認知されてないようだけど。賊の間では「紅蓮団」の紅の狼」なんて恐れられているわよ。多分アイツはそんな二つ名を付けられたなんて気付いてないのじゃないかな。それを知ったら、どんな態度をとるのじゃないかな。

それより心配なのはアイツの回りに女がいないかどうかね。

アイツの本質を知ったら落とされるのは確実だから。

とにかく、アイツが女を連れて帰ってきたらお仕置きしなきゃね。

## 閑話 出会い（理想の始まり）（後書き）

言いたいことは感想で。

アンケートの結果発表といきたいですがこれは本編で出します。なんかすいません。

次回から董卓編です。

P S

原作の魏ルートのエンディングに「涙の種、笑顔の花」（劇場版グレンラガンラガン編ED）が合うと思うのは俺だけ？

では次回（＾＾ゞ

## 10話 意外な護衛対象（前書き）

イヤッファー！

ヘルシング一冊105円全十冊買ってしまった。

これは更新が遅くなるフラグ？

とまあ只今こんな感じです。

董卓の心理描写がなんかむずかしい。

なんかギャグが書きたい。

## 10話 意外な護衛対象

劉備達と別れて、しばらく俺達は涼州に向かっていた。

「ふう、もうすぐ涼州だな。」

「はい。色々足止め等がありましたけど……  
しかし、町に着くまでは油断は禁物です。何時でも何処でも此方の事情を無視して賊は来ますから。」

「わかってるよ。けど、どうすっかな。」

「何をですか。」

「いやな、董卓の人となりを見るためにはある程度董卓に会う機会のある立場にならないといけないのはわかるよな。」

「つまり、どうやってそれなりの地位に付くかということですか？」

「そういうこと。俺はそれなりに董卓の近しい奴に実力を見せて、董卓にお目通りできるかなと思ったわけだが。」

「かなり厳しいかもしれません。」

近しい人間となると、軍師の賈馥、そして武将になると、華雄、『神速』の張遼、そして『飛將軍』呂布といった所でしょうか。」

「まあ、そこら辺かな。つってもそいつらの情報がないから出たとこ勝負になりそうだが。」



しかし、二つ名があるってことは強いんだろうな。」

「同じ武を目指す者として血が騒ぎますか。」

「当たり前だ。この頃豪傑と呼ばれる奴らとやってなかったからな。何処まで自分が強くなったか確かめたい。お前もそうじゃないのか？」

張遼と呂布か。正史でも演義でも名高い豪傑だ。

正直かなり厳しくなるかもしれないが、負けるつもりはない。

「私はそれほどでも、一応武を修めています、どちらかと言うと文の方が合っているのです。」

「そうだな。お前はそういう奴だった。」

ま、それもお偉いさんと謁見出来ればの話しだけだな。」

取らぬ狸の皮算用ってやつだ。

「地道に将が通う店なんかを調べたり、謁見の許可を貰うように言い続けるのが妥当なところか。」

「そうですね。では着いたら情報収集で。」

ま、面倒だがやるしかないと思いつつ、馬を進めっていると、前方に砂塵らしきものが見えてきた。

「早馬…にしちゃ砂塵がでかいな。  
森羅、目の良い奴数人連れて来い。早めにな。」

「御意」

そしてすぐに弓隊の3人が此方にきた。

「隊長、どうしたんスか？」

「お前達にあの砂塵の中で何が起こってるのか見てくれ。」

「了解っす。」

うちの弓隊の連中は総じて遠射、連射を可能だ。  
故に視力の良い奴が自然と弓隊に入っている。

「隊長、見たところお偉いさんが賊から逃げてる所ですね。  
護衛が見えないから賊にやられたと思います。  
どうしますか？隊長？」

ほう、これはチャンスじゃねーのか。

大体この辺りのお偉いさんなら、董卓の部下なんだろうな。

つまり、助ける 雇われる 董卓との謁見許可をもらう 直接面談  
キター！

という構造。

「蒼様、大体考えてることは想像がつきます。  
言っておくと物事はそう簡単に運びません。

しかし、助けることによって董卓に近付けるのは確かかと。」

…なぜだ。なぜこうも地の文を読まれる。

ハッ！まさかこれが巷で有名な…

「そう！私の蒼様に対する愛の力です！」

「違うからな。俺が言いたかったのは読心術な。いやホント地の文読むの自重してくれ。

んじゃ、真面目な話になるが、森羅、お前は五十率いて偉いさんの護衛。

残りは俺に続いて賊を蹴散らす。わかったな。」

「御意。直ぐに終わらしましょう。」

とにかく偉いさんの覚えを良くして、董卓に謁見しなきゃな。

## side 月

今、私はある村の視察の帰りに賊に追われている。

「詠ちゃんの言うとおり誰かについて来てもらったらよかったのかな？」

もう護衛の人もいない。

もうすぐ追いつかれて私も死んでしまうのかな。

「くつ、董卓様。前方に騎馬が！」

もう前も塞がれた。詠ちゃん、ごめんね。

「我々は、傭兵集団『紅蓮団』だ。これよりそちらの護衛につく。」

騎馬の先頭に立っている人の言葉を理解するのに少し時間がかかったけど、助かるかもしれないと思った。

side out

「賊は約二百程ぐらいですね。隊長。」

「おし、それじゃまず全員3人一組に別れる。それで突撃して蹴散らす。」

今回は蹴散らすだけだ。全滅させたら御の字だと思え。死ぬんじゃないぞ。」

「了解！」「」

そう命じ俺達は九組に別れ付かず離れずの距離で賊の中に入って、蹴散らし始めた。

俺のように槍を振るう奴ら、剣を振るう奴ら、鎚や弓等、自分の合った得物で蹴散らす。

俺は《赤光》を馬上で振るいながら回りを見回す。

誰も危ない状況には陥ってない。全員己を考え、回りを考えて戦えている。

このまま直ぐに終わらせるか。とつとと董卓の人となりを見なきゃいけないんでな。

その為にも此処で董卓に近いお偉いさんの覚えを良くしなきゃいけない。

というか今守っている対象は誰なんだろうな？

それなりに偉い立場ならいいが……

そして約二時間ぐらいで戦いは終わった。

賊は大半やられ、蜘蛛の子を散らすように逃げ、こちらは死傷者、重傷者はゼロという大勝だった。

俺は意気揚々で森羅が護っている偉いさんの所に向かうと、ひどく驚いている森羅がいた。

「おい、森羅。どうしたよそんなに驚いた顔して。珍しい。」

「失礼ですね。…まあ、流石にこの状況を考えてなかったのですね。とにかく、この方が我々が護っていた人です。」

森羅が指し示している方向をみると、いかにも上品な、そして儂げな少女がいた。かなりの立場なんだろう。

「まずは俺から名乗らせてもらう。」

俺の名は李高 雲犬。この『紅蓮団』を率いている者だ。」

「あの、助けて下さってありがとうございます。」

私の名前は董卓と言います。」

へえ、董卓ね。そんな名前なのか。

つて、ええー！？

驚きながら森羅をみると頷いている。

いきなりド本命ってマジかよ？

## 10話 意外な護衛対象（後書き）

言いたいことは感想で。

皆さんに聞きたいのですが、登場早々デレデレ桂花がいいですか？  
それとも途中からツンデレ？  
もしくは最後までツンツン？

作者はかなり優柔不断です。皆様の感想が作者の力になります。

では次回（^^ゞ

## 11話 董卓軍の客将として…（前書き）

なんとか出来た。

凄い無理矢理があるような。読み返しも余りしてないし…キャラの口調も難しいし、横文字使えないからしんどい。

まあそんなこんなで始まります。

## 11話 董卓軍の客将として…

護衛対象が董卓と知った時はかなり驚いた。

いやもう董卓の近しい奴だったらなーと思っただら本命の人物って…いやもう冷静になるのに時間が掛かった。

その時にサポートする森羅も「こんな簡単に…理解できない。

はっ、まさかこれが蒼様の豪運！

しかしなんでしょう？この保護したくなるような、味方になりたくなるような感じは。

くっ、このままでは蒼様が董卓の物に…

って何を言っているんだ私は？」

と支離支滅なことを言っていた。

それより森羅よ。俺も理解出来ない。こんなご都合主義は俺も初めてだ。

それに、ランサーさんよりは運があるにしても、俺にそんなに運はないはずだ。

あと、見ていると保護したくなるのは分かるが、俺は華琳の下で働くからな。何度も言っている。

「で、あんた達はちゃんとボクの話聞いてるのかしら？」

何か聞こえると思ったら、まったくこのボクッ娘は…

「愚問だな。こんな急展開付いてこられるわけないじゃないか。」

「はあ、つまり話を聞いてなかったわけね。」



「いやいや。俺はただ現実逃避してただけだから。」

少し説明すると、此処は涼州の宮殿。

賊を蹴散らした後、お礼がしたいとの言葉でそのまま案内され、俺達（俺と森羅）と董卓の他に数名いる中で現実逃避をしていた。だつて仕方ないじゃん。男の子なんだもん！

「同じ事だと思うけど…まあいいわ。とりあえず月を助けてくれた事はボクからも礼をいうわ。ありがとう。」

「いや。礼を言われる立場じゃねえよ。こっちは元々董卓に謁見するために涼州に訪れたからな。余計な手間が省けたからいい。」

「理由を聞いてもいい？」

「まあ、こんなクソツタレな世の中で善政を布いているのはどんなお人好しかと思つてな。見てみようかと。」

「な！貴様、月様を愚弄するか！」

「ちよっ！椿、少し落ち着き！…けどな、アンタも言い過ぎや。ウチも少しイラついたで。」

「すまねえな。けどこいつは誉め言葉だ。言い方は悪いがそう受け止めてくれねえか？董卓さんよ。」

「はい。ありがとうございます。」

いやゝ、良い娘だねゝ。こうなんていうか癒される。まったく、何

で俺の回りにはこういうおとしやかな女がいらないんだろうな。

華琳も董卓を見習っておとなしく……

ハッ、殺気！なんだこれは？イメージは首もとに鎌がある感じ……つてまさか華琳？ええい。陳留の華琳は化け物か？

「全く、月も簡単にお礼を言ったりしないの。」

で、話は変わるけど、貴方達これからどうする積もり？」

この後、どうしようか。まず当初の目的の董卓との謁見は果たせたわけだし、このまま陳留に行ってもいいわけだが……

「もし良かったら、しばらく力を貸してくれないかしら。」

「つまり、客将としてか？」

「そういうことなんだけど。」

「俺としちゃいいんだが、傭兵をすぐに信用するのはちょっとどうかと思うぞ。」

「アンタ達、『紅蓮団』でしょ。それでアンタは『紅蓮団の紅の狼』でしょ。民達の間ではただの傭兵でしょうけど、賊や私達、官の間では有名よ。」

……え、ちょ、マジですか？紅蓮団が有名になったのは良い。俺の計画通りだ。

それに、俺の武もそれなりに知られるようになった。（本名は回ってないが。）けどなんだその恥ずかしい二つ名は？まさか……

「（おい、森羅。お前知ってて、黙ってたたる。」

「（エ、ナニッテルノカワタシワカリマセン。」

「（ふざけるな。どうせこうなることを見越して黙ってたんだろ。）  
」

絶対そうだ。こいつは慌てる俺が見たかったからに違いない。

「で、何か話し合ってるようだけど、返事はどうなの？」

このまま帰って後で情報不足、または利用出来なくなるか、少し我慢して華琳の所に戻るかか…  
選択肢はねえな。

「フウ、分かった。客将としてしばらく厄介になる。契約の内容はまた詳しくってことでいい。

じゃ、自己紹介といこうか。俺は李高、李高 雲犬。一応、紅蓮団の一番上で『紅蓮団の紅の狼』って不本意ながら呼ばれている。今の所自称だが、『最速』を仲間内で名乗っている。今で、後ろにいるのが副官の司馬懿仲達だ。  
よろしく頼む。」

こう言うと、袴にサシの女が『最速』に反応していた。  
イメージは猫。恐らくアイツが『神速』の張遼だろう。

「私はこの涼州を治めている董卓です。真名は月です。よろしくお願いします。」

「って、ちょっと月！？何でこんな奴に真名を預けるの？」

「詠ちゃん。こんな奴は失礼だよ。李高さんは私を助けてくれたんだよ。」

「いや、俺もボクツ娘「ボクツ娘言つな！」…嬢ちゃんの意見に賛成なんだが…」

「これは個人的なお礼として受け取って下さい。やっぱり、ダメですか？」

「……あー、畜生。分かった。分かったからそんな目で見るな。まったく。」

月、俺の真名も預ける。俺の真名は蒼だ。それで司馬懿が「森羅です。」だ。」

「ほら、詠ちゃんも。」

「分かってるよ。ボクは賈馱。月だけじゃ不公平だからボクも預ける。詠よ。よろしく。」

「私は華雄だ。真名は椿。よろしく頼む。」

「ウチは張遼。真名は霞や。よろしゅう頼むで。蒼やん。」

「…呂布…真名、恋。よろしく。」

「ねねは陳宮なのです。真名は音々音なのです。」

全員の自己紹介が終わったんだが、なんだか武官の三名から淒く見

られてる気がする。大方どのくらい強いか試してやる。みたいな感じだろう。

それより今は確かめることがある。

「（おい森羅、音々音は非凡の才があるのを感じるのは気のせいかな？）」

「（いえ、気のせいではありません。）」

「（情報は来たんだろ。）」

「（はい。申し訳ありません。だから…お仕置きを直接お願いします！）」

「（喜んでお仕置きを受ける奴にやるわけないだろうが！あとで頭掴み（アイアンクロー）をしてやる。）」

「（ちっ、了解しました。）」

ふう、もう董卓の陣営は揃ってると見ていいな。

そして、今俺がやることは董卓達との個人的な仲を作り、来るべき戦が起こったら俺の所に引き抜ける状況を作ることか。

ちよいつとしんどいが。もうすぐ華琳の所に戻るんだ。あと一頑張りしますか。

## 11話 董卓軍の客将として…（後書き）

言いたいことは感想で。

やっぱり霞はいいよねキャラ的に。好きなキャラの一人です。

はい。華雄の真名は椿に決りました。理由はイメージにあったから。

桂花の件はツンデレとデレデレが同数になっていたはず（オイ

もつすぐ予備校も始まり、少し遅くなるかもしれませんが。よろしく  
お願いします。

## お知らせ

すいません。

このタイミングで更新しようと思ったのですが、携帯を落としてしまい、見つかったのが水曜という（しかも何も書いてない状況）だったので、次週までには更新します。

話は変わりますが、頭の中で蒼の新しい技を考えているのですが、なかなか思いつかない。

こういうのいいんじゃない？というをお願いします。

あと、集団の戦闘描写のアドバイスを。

あと、白装束で出す三國志のキャラ募集（あと、紅蓮団も一応。こっちはまだわからない）。なるべく詳しく書くと出せると思います。

では次回（＾＾ゞ

注意・ここから先は作者が言いたい放題いう場になります。

つーことでヘルシングを全巻読み切って、いい具合にハイになっている今日この頃。傭兵かつこよすぎ。ハルネコンぱねえ。

最近思ってることはジャンプでやってた「ブラックキャット」とヤングキングアワーズの「トライガン」が似ているな。皆さんどう思います？

只今妄想中なのは、マガジンの「ゲットバッカーズ」と「フェイト」のクロスって面白そう。サーヴァントはキャスターかな？いやダメツトとの共闘とかもいいな。勿論主人公は美堂君で。天野君は空気になるそう。

もうひとつは「スパロボA」の覚セルが「OG・ジ・インスペクター」に介入するのもいいなど。

最後は「マブラブ」に「OG」の機体（ただし、サイバスターとか超機人とかなし）を持ち込み地球圏防衛を果たす。

最後はこの作品です。見てみたい、こうすれば面白くなる。みたいな感想お願いします。



## 12話 手合わせ（vs 椿）（前書き）

皆さんお久しぶり。

前回よりかはクオリティが上がってるはず。

一部のキャラが空気になっていますが、そこは自分の駄文才のせい  
です。

## 12話 手合わせ（vs 椿）

皆さんこんにちは。董卓軍の客将になった蒼です。

なんだか久しぶりにこの挨拶をしたような気がします。

まあ、それは良いとして今宮殿の庭に来ているのですが……

「さて、見せて貰うぞ。蒼。お前の武が月様にふさわしいか確かめてやる。」

何故か月達がいる中で目の前にいる椿と手合わせすることになっている。

というか椿って、なんか春蘭と同じ感じがするな。

椿+百合=春蘭って感じかな。

案外話をさせてみれば気が合うかも……いや、もしかしたら自分の主君自慢で、喧嘩しそうだ。

まあ、そんなことはどうでもよく、結論から言うと、客将として向かえられた『紅蓮団』の上にいる俺の武を正確に見極めよう。

という建前で、実際は二つ名を持っているくらい強いのなら手合わせしてみたいぐらいの考えなんだろう。（まあ、詠は建前の方が本音っぽいが。）

しかし、一人とやるならともかく、椿の後に、霞、恋と続く連戦は多少きつい。実戦だったら、おそらく霞辺りで切り上げるところだが、自分自身がどこまでいけるかを試したくなっているようだ。

……いや、絶対。これはランサーさんからの悪癖のはず。分の悪い賭けは好きだけど俺の素の性格から来ているものではないはず。

俺は戦闘狂ではない。バトルマニア俺はことなかれ主義の平和主義者だ。

……そう、ただ刺激が欲しいだけ。この手合わせはただ俺を退屈しバトルマニアのぎで、強い奴とやり合いたいだけ……、ってこれ戦闘狂の台詞じ

やねーか！orz

「何を落ち込んでいるのかは知らんが、やる気がないのか？」

「…ああ、いや。自分の性格を再認識して落ち込んでただけだ。まあ、俺はいつでもいいんだが、そっちはどうなんだ？」

そう言いつつ、気を取り直し、体に流れている気をさらに速く動かす。

これが俺の気の使い方、体に循環して流れている気を一種の血液とイメージし、身体の強化を行う。

これにより全体的に強化され、特に新陳代謝や反射神経などが強化される。

「私もいつでもいいぞ。こい蒼！私の武で貴様の武を打ち砕いてやる。」

そして、椿は戦斧を構える。俺も何時もどおりに槍を構える。それと同時に自然と心が昂ぶる。

「いいね。いいね。その気迫。来いよ椿。少しでも氣イ抜くとすぐに終わっちゃうぞ！」

そう言い放つと同時に二人ともお互いの間合いに入る。

初手は譲る。椿の攻撃を槍で全て受け流す。

やはりと言っかなんと言うか、威力はあるけどは一直線だな。

さて、ここで椿に稽古をつけるのもいいが、もしかしたらあるかもしれない反董卓連合を考えると……

どうしたもんか。

「なんや蒼っち、えらい防戦一方やけど大丈夫なんか？」

そう呟くのは霞、『神速』の二つ名を持つ武人。

「…大丈夫、蒼、本気出してない。」

それを否定するのは『飛將軍』の名を持つ恋。

実際、この二人は蒼の実力は椿よりも上だと感じている。いや、おそらく自分達よりも…

「大丈夫ですよ、あれは蒼様の悪癖でして。」

溜め息混じりに、森羅は二人に言う。

「悪癖って、蒼っちの防ぎ方、かなり危なっかしいと思うんだけど、そこんとこの説明よろしく頼むで、森ちゃん」

「お願いします。私のことは森羅と。」「いやや、森ちゃん。」「森羅」「森ちゃん」…はあ、分かりました。もうそれでいいです。

蒼様の防ぎ方は殆ど正面からではなく、あのように受け流す形になっています。理由は正面からより力を使わないからだそうです。

悪癖の方は、自分より弱い相手に初手を譲り、相手の攻撃を全て防いでから、攻撃を始める癖です。実際我々『紅蓮団』全員にこのように戦い、勝っています。」

本当に、自分の誇りを失いかけたよ。と愚痴を漏らしながら説

明する森羅に疑問を持った霞は質問する。

「その戦い方って相手が疲れた所を攻撃するってことやる。それが蒼っちの戦い方やないん？」

「甘いですよ。蒼様は自称とはいえ『最速』を名乗っているのですよ。」

本当の戦い方は相手が対応出来ないぐらいの速さで攻撃を繰り出す戦い方です。あの戦い方は自分の速さに初撃から対応出来ない人用とも相手の力量を試すとも言っていました。

本音はそんなに早く勝負が決まるのはつまらないから。という理由なのでしょうが…

おそらく、そろそろ攻撃にうつる時間でしょう。」

その直後に手合わせが動き始めた。

s i d e   o u t

本当にどうしようか悩んでいる内に椿による猛攻が終わった。といっても動きにフェイントが殆どなかったので受ける側としては楽ではあったのだが。

というかよく此処まで力強く斧を振るえるよな。その力を少し分けてもらいたいな。

「蒼、貴様。真面目に戦え。さっきから私の息切れを狙っているのだろうが、貴様に武の誇りはないのか！」

「いや、俺お前の息切れを狙ってるわけねーだろ。つーか、正面から切り結ぶのが武の誇りだとしたら俺にそんなもんはねーよ。」

もしお前にそんなもんがあるのなら捨てちまえ。」

「なんだと！貴様ー！」

俺の言葉に怒り、更に攻撃が単調になりはじめた。もう、決定だ。こいつ危なっかし過ぎる。少し考えを改めさせるか。そう思い身体全部を使い、椿の攻撃を押し留める。

「怒るなよ。」

つたく、少し落ち着け馬鹿。お前の攻撃、単調になりすぎてんぞ。」

「その何が悪い。当たればいいのだ当たれば。」

ダメだこいつ、とつとと負かして、落ち着かしてからでないと話を聞きやしねえ。

まあ、取り敢えず。

「てめえに正しい戦い方を教えてやるよ。」

俺は少し離れて、槍を構えなおす。

そして、椿が間合いに入った瞬間攻撃（講義）を開始する。

「まず、基本だが。一騎打ちや一騎打ちの本質は相手と己の間合いの陣取り合戦だ。」

そう言いつつ、椿の間合いを俺の間合いに変えるため、刺突、斬撃、打撃を組み合わせて、相手に防御しか許せない状況にしていく。

「そして、その為には虚実交えて攻撃しなければならない！お前のように正面からだけだと今の俺のように直ぐに見切られるぞ！」

そして、椿の間合いを大体掌握した。後は止めだけ。俺は石突きの方で椿を突き、一時的に行動不能にして槍を首筋に当てる。

「これにて終了だな。」

「くっ、もう一度戦え！今度こそ私が勝つ！」

「無理だね。っーか今のお前と戦ってもちつとも面白くねえ。」

「なんだと！」

「いいから聞けよ。」

まずだ。戦に次があると思うんじゃないよ。勝ったら大体が生き残り、負けたら大体が死ぬ。これが戦の理<sup>ことわり</sup>だろ。

そして、生き残る為にはどんなに昂ぶつても冷静に周りを、そして己を見る必要がある。なのお前は頭に血が上り、攻撃が単調になり、俺に見切られ負けた。つまり、死んだんだ。分かったか。」

「だが、正々堂々と戦ったのだ悔いはない。」

この馬鹿野郎が。

「お前は、お前の武に誇りがあるのか？」

「当然だ。それがどうした？」

「なら、その武、誰に対して誇っている？」

「それは勿論月様や仲間の者達だ。」

「なら、月達がお前が侮辱され、その武を掛けて突っ込んで死んでいくのを望んでいるのか？」

「それは……」

困惑する椿。

自分の価値観を無理矢理変えられているんだからしょうがないっちゃしょうがないんだが、少し見てられない。

「俺は、いや俺たちは生き残るために、より上手く殺す為の武を極めようとしている。」

そして、生き残ることで仲間が安心する。

だからな椿、俺は生き残る為の武には誇りを持ってるが、死ぬための武なんぞは持ってねえんだよ。

死んだら皆悲しむし、落ち込む。そして士気が下がって負けに近づく。わかるな。」

「ああ、そうだな。」

だが、私はどうすればいい？私の武が間違っているのは分かった。しかし、私には武しかない。」

「んなもん俺が知るかよ。自分で考えな。」

そう言い放つと、椿はかなり落ち込んでしまった。

周りを見ると、全員からどうにかしろと目で訴えられている。

ああ、畜生。分かったよ。



「少し助言しといてやる。自分の主君を悲しめるな。生き残り、月を喜ばせな。生き残るために頭を使え。常に周りを見る。それが出来るようになったら、また戦ってやるよ。」

そう言うのと、椿は何かを悟ったのか真っ直ぐこっちを向いて来た。

「蒼、礼を言わせてもらう。」

もし、お前と会わなかったら、私はいつか月様を悲しませただろう。私は一から武を見直す。そして見直せたら、もう一度手合わせをお願いする。

今度こそ、お前の本気で。」

いい目だ。次は楽しくなりそうだな。

「勿論だ。次は何時かは分からないが必ず。」

そう返し、握手をする。

次は霞か。面白くなりそうだな。こいつは。

## 12話 手合わせ（vs 椿）（後書き）

言いたいことは感想で。

終わり方が少し無理矢理な感じがしています。

椿の性格の改善フラグが立ちました。

少し悩みましたがこれで行きます。

次は霞との手合わせです。まだ何も書いてないので次週になりそうですが…

というか毎日や数日おきに更新している人ってどんな感じで書いているのでしょうか？

自分は書くのに4日から5日、残りは添削して週間で更新になっています。

あと、桂花のアンケートが同数という事態です。

あと、前回書いていたキャラの募集も。

一応、紅蓮団のキャラで採用しようと思うのは隠密関連ですね。一応、武器は鋼系で戦い方はヘルシングのウォルターさんみたいなのを考えていますが、出るかどうかわかりません。

白装束の集団は最低でも一人は出そうと思います。出来れば経歴も

では次回（＾＾）

追伸、

誰か前回書いたネタで小説作ってくれたら嬉しいです。

### 13話 最速vs神速（前書き）

今回は前回戦闘描写が駄目だという感想を頂き、それを意識して書いてみました。

クオリティを上げるよう頑張っていますが、駄文だと思います。

### 13話 最速VS神速

椿との手合わせ（講義）を終え、本当に椿にあんなことを言っ  
てよかったのか（反董卓連合的に）考えるが、次の相手と戦う為  
に思考を切り替える。

次の相手は霞だ。

演義、正史どちらでも良将として有名な人物。

ただし、俺の目の前にいる同一人物は袴に、サラシの女なの  
だが……だからといって、油断は出来ない。

今までの体さばき等を見ても非凡の武を持っていることはわ  
かる。また、相手がどのように戦うか分からない内で自分の手  
札を見せるのは愚策と考える。

だからこそ、気が抜けない。

「よし！次はウチやで。蒼っち。」

そう言いつつ、目の前で己の獲物を構える霞。

まあ、俺としても早くやりたいわけだが。

「なあ霞、その蒼っちってのはなんだよ？」

「いややわ、真名が蒼やから蒼っちや。ええやろ？」

「いや、ええやろって……」

まあ、いいんだけどよ。

こうもう少しかっこいい呼び方とかは「ないで。」……さい  
ですか。いいよ。もう蒼っちで。好きに呼んでくれ。「では、  
私も！」だが

森羅、お前は駄目だ。なんか『旦那様』とか言いそう。」

すぐに森羅の舌打ちが聞こえてきたような気がするが気のせいだろう。

「つか、手合わせをする空気じゃなくなっていると思うのは俺の気のせいなのかね？」

「話は戻すけど。霞よ、俺とやるんじゃないかったのか？」

「ああ、せやな。」

ほな始めようか。蒼っちの『最速』とウチの『神速』どっちが速いか勝負や。」

俺は霞の『神速』の二つ名は用兵に対してのものだと思ったんだがな。俺と同類ってわけか。

「おつ、速さ勝負か。」

いいね。今まで生きてきて、同じような武を持つてる奴とやったことがなくてな、まあ候補はいるんだが、何時やれるかわかんねえからお前が同類と分かって嬉しいぜ。

気を付けろよ。

俺は手加減しねえからな。最初っから速度上げていくぜ。

速さと速さのガチンコだ。楽しもうや。」

そう言いつつ、槍を構え、霞が準備するのを待った。

目の前で蒼つちが構えてる。その構えに隙はない。蒼つちは強い。

蒼つちはウチらと同じく武の才に恵まれてる。けどそれに慢らず、自分を鍛え此处まで登ってきたヤツや。

恐らく、気を抜けばやられる。蒼つちのあの目は獲物を捕えた目、自分の武と殆ど同じ武と交えることが出来る喜び。

多分、そんなかんじやろ。ウチも同じや。恋も椿も強いけど一撃、一撃に全てをかける武や。

けど、ウチの武は手数で相手を圧倒する武、いつかは同じ武を持つ相手と戦いたかった。そして、今目の前に同じ武を持つ蒼つちがいる。

そして、蒼つちもウチに対して同じ気持ちやったんやろ。

だからさっき森やんが言っていた『手加減』をせず全力で来る。

なんや、怖いけどワクワクしている自分がいる。

誰が一番強いかわからなく、誰が一番速いかわからなく。

『最速』には悪いけど勝つのは『神速』のウチや。

「いくで、『最速』！」

side out

「いくで、『最速』！」

そう言うと同時に霞が突っ込んで来る。

ここでかわすことで相手のリズムを狂わせ有利に進めることができるがこの手合わせは正面からの速さの勝負。逃げるわけにはいかない。

「残念だが『神速』じゃあ『最速』には勝てねえぞ！」

そして俺も接近し、二人共お互いの間合いに入る。

この速さの戦いの勝敗の行方は有効な手数が多さ、つまりいかに速く攻撃を連続で出せるかになってくる。まあ、結局は突きの連続になるわけだが、俺の槍とは違い霞の得物は偃月刀だ

突きも出来るが本来は切る為に作られたものだ。

だから、霞の攻撃は突きを主体とした切ることを組み込んだ戦いだ。

だから、俺はその切る動作をさせないために突きの照準を偃月刀とそれを持つ腕を本命にする。

「っ、なかなかえぐいことすんなあ。

けど、それやったらウチは止まらんで。」

俺の狙いに気付いた霞は、そう言いつつスピードを上げてくる。

ここまでは予想通り。

「やっと、速度がのって来たか。少し遅いんじゃないのか？」

「へっ、そないな負け惜しみを言っても何も変わりはせえへんで。」

「舐めるなよ。この手合わせは相手の最高の速さを叩かなきゃ意味がねえんだよ。」

そう言い放つと同時に戦略を変える。

今までは拡散していた突きの点を一ヶ所に更に速くたたき込む。つまり多数の点の攻撃による面制圧。

こいつが本来の俺の突き。狙うは偃月刀、本当の戦場なら胴体を狙



うとこだが、手合わせだしな。

そして、俺の突きに対処しきれなくなってきた。

「残念だったな。けど仕方ねえぞ。

神と同格の速さの『神速』が最も速い、神よりも速い『最速』に勝てるわけがないんだからよ！」

そう言い放ち、渾身の突きで、霞の偃月刀を弾き飛ばす。

「これで詰みだ。」

「そうみたいやな。あー、なんか楽しかったけど悔しいわ。また、蒼っちとやってええか？次は勝って、『最速』の名前、もらうからな。」

「ハッ、やってみるよ。

そう簡単に『最速』に追い付けるもんなら追い付いてみる『神速』。何度でもやってやる。」

そして、握手をする。

これで後一人、三国一の豪傑、呂奉先こと恋だけか。

### 13話 最速vs神速（後書き）

言いたいことは感想で。

なんか、霞とランサーさんは似ていると考える今日この頃。

次は恋との手合わせです。お付き合いいただければと。

董卓軍の拠点フェイス書いた方がいいですか？

書くとしたら二人ぐらいが限界なので、霞、詠、恋、月の内誰かを上げてください。

後、桂花の件はツンデレとデレデレが同数でした。  
次回までに同数でしたらツンデレにします。

では次回（＾＾ゞ

## 14話 最速VS最強（前書き）

なんとか出来た。

戦闘描写がいまいちのような気がする。

駄文です。

## 14話 最速vs最強

椿、霞に勝ち、手合わせの最後になつたわけだが…

「最後は一番強え奴つてのはお約束なんだろうな。」

目の前には恋、呂奉先がいる。

三國志の中で豪傑と呼ばれる将は多数いるが、その中で一番は誰かと聞かれると呂奉先と口を揃えて言う程に強さは群を抜いている。というか武では椿、霞、恋。知では詠、音々音つて月がやる気だしや天下取れるんじゃないのか？  
いや、この月の性格だからこそ、ここまでの人材が揃つたと考えるべきか…

「まあ、そんな問答は後に置いとくべきだな。  
なあ、恋よ。」

それを頷くことで恋は返してくる。

敢えて言わせてもらうなら勝てるかどうか分らない。

恐らくだが、史実の呂奉先ならば神秘をもつ英霊とタメをはれると考えられる。位は、ランサー、ライダー、アーチャー、バーサーカー、後、もしかしたらセイバーかな。

とにかく、勝てるかどうか分らないのが実情で、そのせいで今まで昂ぶっていた身体が更に昂ぶるのを感じる。

「さあ、行くぜ恋。お前の武（力）と俺の武（速さ）、どっちが強いかはつきりさせようぜ！」

そう言いつつ接近し、己の間合いに入れる。  
対する恋はその場で構え、迎う打つようだが…

「甘いんだよ！」

身体の全てを使い、移動しながら突きを放つ。  
このまま、一気に流れを作って…

「…甘い。」

そう言いながら、恋が常に移動している俺を捉えて攻撃する。  
まあ、そこら辺は予想通りなわけだが…  
そう思いつつ防御したら、身体ごと吹っ飛ばされ、間合いが開く。  
身体へのダメージはなんとか受け流せたが。

「一発で流れを変えるのは反則じゃねえか。」

「…そう簡単にやらせない。」

そして、お互いに構え直す。

今の速さなら捉えられて恐らく負ける。なら更に速く鋭くしていく  
しかない。

かなり厳しいが、分の悪い賭けは嫌いじゃない。

side 三人称

「蒼っちもよく防いだけど、恋もようあの速さを捉えられたな。」

「当然なのです。恋殿は無敵なのです！最強なのです！」

「まあ、蒼様ならあのぐらいの攻撃など対処するのは当たり前ですから。」

「む、あのぐらいの攻撃とはなんですか！恋殿の攻撃はもの凄いのですぞ！」

「一発しか当たっていませんが。」

「く、恋殿ー。そんな男など直ぐに倒してしまうのです！」

ただ一度の相対で凄まじい武の応酬を行った二人を見ている者（口論している二人以外）は感心して見ていた。

攻撃の速度を緩めず、絶えず動き回りながら攻撃し、防御もしつかりとしていた『最速』。

対するは、その連撃を全て、避け、防ぎ、そして力強い攻撃を当てた『最強』。力と速さ、対立する二つの武に魅せられ、また武人の血が騒いでしまうのは仕方がない。  
だがそれよりも……

「……霞。」

「……ああ、そうやな椿。このままいけば、恋の勝ちやろうけど、蒼っちも何か仕掛けてくるで。」

武人の感覚が己に告げていた。

蒼はまだ底を見せておらず、本当の手合わせは此処からだ。

「……ままならんもんな。」

「……ああ、そうだな。だがいつかあの二人に勝ってみせる。」

「……せやな。」

二人の胸には憧れ、嫉妬が渦巻いていたが、なにより目標の高さに喜びつつ、この試合を見ていた。

side out

さてと、此処から更に上げるとかなり厳しいな。

まあ、運がいいのは恋が俺を警戒して、待ちの状態に入ってることだな。

こいつはまだ不完全で出来れば使いたくなかったんだがな。

「フー。」

恋を警戒しつつ、呼吸を整える。そして意識を少しずつ広げていく、自分、恋、そして手合わせを見ている連中、さらには周りの木々や石、地面にまで、ありとあらゆる気の流れに意識を向ける。これで第一段階は終了。此処からが問題。

次に己の身体に流れている気を、持っている《赤光》に流し循環させ擬似的に身体の一部とする…はずなんだがやっぱり中途半端にか流れていない。

まるで意図的に血の流れを悪くしているような感覚だ。

それでも気を流したからか檜のまがましい雰囲気が出ている。明らかに恋も引いてるし。

「…その槍…何？」

「ああ、すまねえ。ちょいっと曰く付きの槍でな。」

誰も知らないだろうけど、こいつはかの英霊クーフーリンの宝具、  
ゲイボルグ魔槍とほぼ同じだからな。

ま、とにかくこれで仕込みは完了。こっからが本番だ。

「さてと、限界を越えさせてもらぜ！」

「…来い」

俺の勝利条件は攻撃に当たらず、手数で相手を圧倒すること。

恋の勝利条件は俺の連撃を全て対処し、自分の攻撃を当てること。

俺の方が不利な気がするがまあいい。

そう決心し、突っ込む。此处は強引にでも流れを作らないと負ける  
かもしれない。

身体が無駄な動きを省き、最速で恋の間合いの中に槍を突き出す。

「…さすがに…速い。」

「こいつは止められるのは想定内なんだよ。」

初撃は止められる。

こっからが勝負。恋の間合いに入るか入らないところで動きながら  
槍を繰り出す。

狙うのは武器なんて言っている場合じゃない。

恋を動かさない為の牽制以外は全て倒すための一撃。それも全て対  
処される。

これも想定内。



そしてわざと恋の間合いに入り誘う。

「…貰った。」

恋が誘いに乗り、攻撃してくる。

普通は此処で後ろに下がるところだが…

ここは前にでる。躲せば勝ち、当たれば負けの大勝負。俺の速さを躲すに賭ける。

態勢を低くしてそのまま間合いの中心に。

そして至近距離に入る。

そしてそのまま槍を放ち、寸前で止める。

「少々危なかったが、俺の勝ちだな。」

「…ん、恋の負け。」

いや、危なかった。恋の攻撃が当たったらと思うとゾツとするな。

「で、これで俺の実力が分かったか？詠？」

「まさか恋にまで勝っちゃうなんてね。」

「まあ、恋はかなり危なかったがな。」

「その前の二人も充分強いんだけどね。まあいいわ。」

多分、客将として主に賊の討伐と、兵の鍛練をお願いすると思う。」

「了解した。森羅、詠と報酬の件で話し合いをしてくれ。」

「御意」

恋との手合わせが終わり、ちゃんと評価され、詠と今後、俺達は何をするのか話していると霞が後ろから声をかけてきた。

「まあ、堅苦しい話も切り上げて、蒼っち達の歓迎として酒盛りをせえへんか？」

といつつ酒を片手に誘ってくる霞。まあ、嬉しいんだが、お前ただ飲みたいだけだろ？  
といつつ、俺も飲みたいんだがな。

「いいね。俺も酒がいけるクチだ。酒もかなり強いからな。楽しくなりそうだ。」

まあ、この後は歓迎会として、酒を飲みまくり、恋とねねと森羅と月以外は二日酔いで森羅と月に説教されたのはいい思いだ。

## 14話 最速vs最強（後書き）

言いたいことは感想で。

なんだか終わり方がいまいちのような…

今回は拠点フェイズになります。次回は月、その次に詠になります。

桂花はデレデレでいこうかと思っています。

初めての拠点フェイズなので、少し遅れると思います。

では次回（^^ゞ

15話 笑うべきだとわかった時は泣くべきじゃない(前書き)

無理矢理時間を作って書いた。

今回は初めての拠点フェイズなので拙い部分が多々あると思います。

今回は月の回です。

携帯で打つのはしんどい。

## 15話 笑うべきだとわかった時は泣くべきじゃない

「あー、やっと終わった。」

今、俺は今日の兵の鍛練を終え、街をぶらついている。

なぜぶらついているのかというと、街の様子を見るためという建前で賭場を探しているわけだが。

「なんで、あんなとこにいるんだ？」

目の前の茶屋に月がいた。なんだか詠もないし、お忍びか？  
だったら無視した方がいいのか、それとも声をかけるべきか？

お忍びといってもなんかあったら一大事なわけだから普通に声をかけるか。

「よお月、詠もないのにこんな所でなにしてんだ？」

「あ、蒼さん。茶葉を買おうと思って来たのですが、何か好きな種類とかありますか？」

「いや好みとかはないからなんでもいいんだが…  
このことは詠は知ってんのか？」

それを聞いて、月は気まずそうに首を振る。  
やっぱりお忍びだったか。

「まあ、息抜きしたい気持ちもわかるがな、もう少し自分の立場を理解しといた方がいい。」

「…すみません。」

そのまま落ち込む月の周りの空気が重くなる。  
つたく、こんな感じにする為に声をかけたんじゃないってのに。

「あー、まあ、その、なんだ？ただ立場が立場だから出る時はちゃんと saying から出ることだな。

ずっと閉じこもってる。って言ってるわけじゃないからな。変に誤解すんなよ？」

くそつ、女の機嫌取るのは柄じゃないんだよ。

こついう時はどう言えばいいんだ？

「ふふ、はい。分かってます。」

雰囲気が変わったから機嫌が良くなったと思ひ顔を見ると笑っている。

「分かってんならいいんだが、笑わないでくれるか。」

「すみません。けど焦っている蒼さんがなんだかおかしくて。」

そう言いながらも笑う月に怒ろうとするも、なんだか怒りづらい。  
一気に話を終わらせるか。

「まあ、とにかく！皆に心配かけんなよ。それが言いたただけだからな。」

頷きつつも笑う月を見ながら、諦め、この話を切り替えることにす

る。

「まあいいや月、お前まだ時間あんのか？」

「あ、はい。今日のお仕事はもう全部終わってますので。」

「ならいいや。月、ちよいつと街の案内をしてくれねえか？」

まあ、実際は賭場がどこら辺にあるのか把握したいんだがな。月はこのというのは眉をしかめそうだな。

「はい。いいですよ。」

ま、期間限定とはいえ此処の客将としているんだ。街の様子とかも見ないとな。

side 月

「此処が街を一望出来る場所です。」

今、私は蒼さんに街を案内している。

蒼さん。霞さんや椿さん恋ちゃんにも勝った人。

そして、誰でも分け隔てなく人と接することが出来る人。

「スゲーな。本当に街全体が見える。」

蒼さんはそう言いつつ眼下にある街を見ながらはしゃいでいる。まるで子供がそのまま大きくなったようにも感じられる。

けど、彼は傭兵だ。恐らく大陸一の。つまり酸いも甘いも知っている。しかも一人ではなく、一部隊を率いる立場にある。多分、森羅さん達は彼の武と性格に惹かれたんだろう。

「すげーよ、こんないい街はそうないぜ。頑張ったんだな月。」

「いえ、頑張ったのは詠ちゃん達であって、私じゃないんです。」

そう、私は何も優れていない。

頑張ったのは詠ちゃん達で、私は当たり前のことをしただけ。

「あんな月、」

そう言いつつ頭を撫でる

その撫で方は不快になるものではなく、どこか胸の奥が熱くなるような落ち着く感じで。

「お前は少し考えすぎだ。お前はちゃんと自分のしなきゃいけないことをちゃんとしたんだろ？ならいいじゃねえか。」

「けど、詠ちゃん達は私より優れていて、私は当たり前のことしかできない。」

蒼さんに今まで閉まってきた感情を曝け出す。

「それに、私は血を被ることに慣れてません。だから、私なんかより優れて、覚悟を持っている人に仕えた方がいいんです。」

いつも考えてしまうことを喋ってしまう。



失うのは怖い。けど大切な人が私のせいでその才能を活かせず、後悔するのはもつと怖い。

それを客将の蒼さんにぶつけている。

「月、ごめんな」

それを言った蒼さんは撫でていた手で、私を叩いた。その顔は何処か怒った顔で。

「月、お前はバカか？アイツらをなめるな！お前の元から去るつもりならもうとつくに去ってる筈だ。主が部下を選ぶように、部下も主を選ぶんだよ。」

当たり前のことしか出来ない？いいじゃねえか。それが出来ない奴もいるし、それで民が安心して暮らせてるじゃねえか。

血を被ることに慣れてない？いいじゃねえか。その重荷の分自分の民を幸せにしてやれ。

それにな、アイツらはお前だからこそ頑張んだよ。お前だから仕えんだよ。こんな良い街作って、当たり前のことするお前だからいるんだよ。」

蒼さんの言葉は怒っているけど、何処か励ましていて、私の不安をかき消してくれるもので、思わず涙が出てしまつぐらい安心させるものでした。

だから、あんなことを言ったから謝らないと。

「グスツ、ごめんなさい。」

「あのな、月、謝んな。んで泣くな。」

こういう時は笑え、口の端釣り上げてニコって。」

「こ、こうですか？」

蒼さんにいわれ、泣くのをこらえ、自分なりに笑ってみる。  
それを見た蒼さんは頷きながら笑みを浮かべていました。

「やりやあ出来んじゃないか。」

いいか、泣くことがあってもいい、歯をくいしばることもあってもいい、でもそれ以外の時は笑っている。

なにかあつたら心で考えろ、今はどうするべきかをな。

そうして笑うべきだとわかった時は、泣くべきじゃないんだよ。」

そういう風に言い放つ蒼さんは、何処か飄々としていて、今まで悩んでいたのが馬鹿らしくなるくらい、晴れやかな気分になりました。

「さてと、そろそろ帰るか。あんまり暗くなると詠とかがさらに心配するならな。」

「あの、蒼さん。」

そう言いつつ、先を歩こうとする蒼さんに私は教えて貰った笑みを浮かべながら...

「ありがとうございます。」

お礼をした。自分の悩みを聞き、そして諭してくれたお礼として。

「及第点だ。」

ほら、帰るぞ。」

そう返してくれた蒼さんは嬉しそうに笑いながら、先に進み、私は

それに着いていきながら帰りました。

それにしても、あの後から蒼さんの顔をみると胸が熱くなります。  
これが恋なのでしょう？

15話 笑うべきだとわかった時は泣くべきじゃない(後書き)

言いたいことは感想で。

こんなに簡単に惚れてもいいのだろうか？とかありそうですが、これが限界です。

月はこんなかんじかなと思います。優秀なのに周りがすごすぎみたいな。

そして一番言いたいののは  
こんな良い娘を種馬なんぞに渡すか！ということです。

早く蒼に宝具を使わせたい作者です。

次回は詠だよ！

では次回(^^ゞ

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6472u/>

---

恋姫無双 槍兵の力を持ちし者が行く

2011年10月6日15時29分発行